

## 小規模井戸灌漑のブラーマン村落の展開

— インド・ラージャスターン州ジャイプール県アバネリ村の事例 —

中 里 亜 夫

(1999年9月10日受理)

### 1. 問題の所在

本章では、ヒンドゥー文化の核心地域に位置し、干ばつの頻発に苦しみながらも、小規模井戸灌漑による耕種農業の集約化と搾乳業に新しい方向を見いだしているラージャスターン州東北部の1村落の実態を、特に1960年代以降からの“農村経済の多様化”に注目しながら、その変容過程を明らかにする。

標本調査村落のあるラージャスターン州東北部は、歴史的にはブラジ・ブーミ (*Brij Bhoomi*, 草を食ませる土地)、つまりガンガ・ヤムナ両川の河間地帯にあり、マツラ・プリンダバン (*Mathura-Vrindaban*) 地域と呼ばれ、ヒンドゥー教のビシュヌ神がクリシュナという人格をとって降誕し、さまざまな遊行をしたという神話・伝説の中心舞台に隣接する地域である<sup>1)</sup>。マツラ・プリンダバン地域は、歴史的に、牝牛を飼育し、またガウ・マタ (*Gau Mata*, 母なる牛) として祭り上げるクリシュナ信仰がさかんな地域であり、「ミルクとバターの巨大な貯蔵庫」として古くからよく知られている<sup>2)</sup>。

標本調査村落に選定したアバネリ村 (*Abhaneri*) は、ラージャスターン (*Rajasthan*) 州ジャイプール (*Jaipur*) 県の東部、バスワ (*Baswa*) 郡下の旧徴税村であり、8世紀の建立とされる後グプタ期の代表的寺院ハルシャト・マタ (*Harshat Mata*) のある村としてよく知られている<sup>3)</sup>。現在は周辺5ヶ村と合わさって一つの行政村アバネリ村となっている<sup>4)</sup>。ヒンドゥー文化の核心地域にあるこの村落は、ヒンドゥーイズムにより組織化されたブラーマンの村落 (*Bramanic Village*) としての成熟が見られる。また、ブラジ・ブーミ地域の特徴である広い放牧地と家畜飼育を伝統的生業にしてきた牧畜カーストのグジャー (*Gujar*, 家畜飼育) の定住する村

落でもある。

ここでは、このような村落がインド独立後の土地改革、人口増加、都市化等の影響を受けながら農村経済の多様化を図る過程とその実態を、①農業部門 (耕種農業と畜産)、②手工業・サービス部門、③都市型雇用などに見る就労の多様性のあり方、から明らかにすることにする。自然資源の貧弱さが、低位生産と出稼ぎ経済を結果づけることから、伝統的生業としての家畜飼育、特に搾乳牛飼育が経済的多様化の一つの方向として新たに登場してきた点と、地域資源と歴史的慣性との関連に注目した。特に、家畜飼育にみる近年の変化、いわゆる“白い革命”と呼ばれるミルク増産革命の展開を村落レベルで検証することとする<sup>5)</sup>。これは“緑の革命”にも対比される農村の貧困克服の一つの切り札とも見なされている<sup>6)</sup>。

現地調査は、広島大学インド農村調査 (代表者: 藤原健蔵, 研究課題『インド干ばつ常習地域の農業と農村の変化』) の一環として実施した。すなわち、標本調査村落の全世帯を対象にした悉皆調査、特定テーマについてのサンプル調査及び郡・県レベルでの関連資料の収集 (主に耕種・ミルク集荷関係) である。なお、調査村落の選定に当っては、当村はミルク生産の上では平凡であるが、1960年代と現在との比較考察に利用できる1961年国勢調査一村落調査報告書 (以下『村落調査報告』と略称) があり、しかも現地調査に村民の協力が得られることを考慮した。

### 2. 村の概況

#### 1 位置と自然

本村はアラバリ山地北部の丘陵地帯に南北に長く続く小盆地にある。村から6 km離れたバンディクイ (*Bhandikui*) 駅を通じて、州都ジャイプール及び観光都市アグラ (*Agra*) までそれぞれ2

～3時間、首都デリーまで5～6時間の距離である。デリー、ジャイプール、アグラを結ぶ正三角形は、ゴールデン・トライアングルと呼ばれるインド観光の目玉であり、本村はこの正三角形の底辺の中間付近に位置する(図1)。

村域は、南北に長い長方形を呈し、北はサンワン(Sanwan)川、南はバン・ガンガ(Ban Ganga)川で切られ、東にデサパダ(Dessapada)村、西にバダガオン(Badagaon)がある。南北の河川は、乾季には水がなく、家畜を連れた牧畜民の通り道となる。しかし、雨季には、しばしば濁流となり渡河が不能となる。年間平均降雨量は635mmであり、熱帯ステップ・半乾燥・酷暑(Tropical Steppe, Semi Arid, Hot)気候と位置づけられる<sup>7)</sup>。年降雨量の80%は、6～9月のモンスーン季に集中する(図2)が、年による変動が極めて大きい。これを年降雨偏差指数で見ると約40%である<sup>8)</sup>。特に調査年の1987年は100年来の降水不足であり、前年に引き続いて大干ばつとなった<sup>9)</sup>。カーフ(Kharif)作の収穫は、灌漑耕地で平年作の7、8割程度、天水耕地に至っては良いところで2、3割程度、収穫皆無の例が多かった。

村域の地下水面については、図3の通り、南北両河川に近い所で高く、村域の中央部に向って低くなる。地下水面の季節変動は約10m前後もあり、しかも近年は全体として低下傾向が顕著となっている。井戸の増設だけでなく、揚水方法が従来のバロック(Bullock、一組のゼブ去勢牛)によるものから、最近ではディーゼルもしくは電気揚水に変わったためと思われる。

村内の土壌は、沖積層由来の砂質ローム土壌であり比較的肥沃である<sup>10)</sup>。透水性が悪いため、

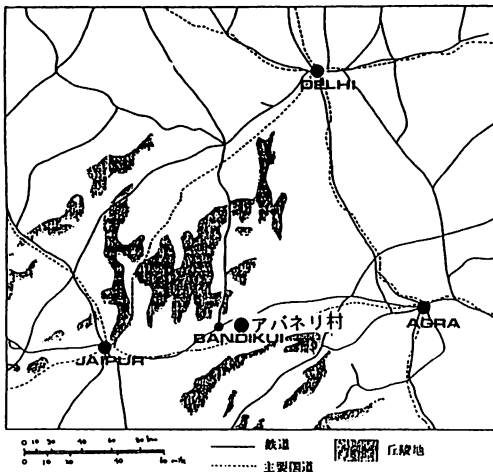


図1 地域概況図

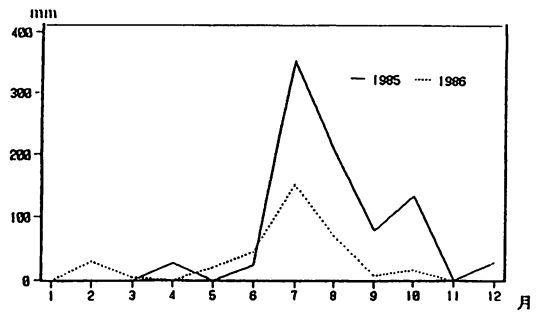


図2 降水量の月別分布(バスワ町)

(資料:バスワ郡役所)

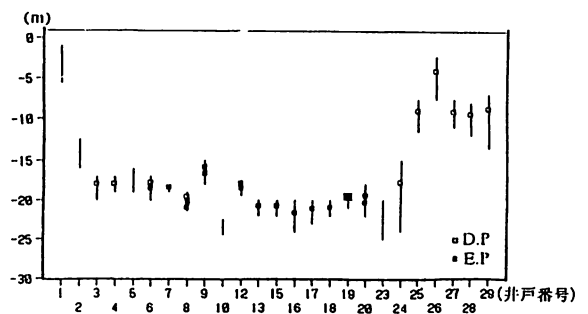


図3 地下水面の季節変動

(資料:藤原健蔵・牧野一成作成, 1988)

強い降雨時には表流水が激しく土壌を洗い流している。村域の南北両端にある3ヶ所の共同放牧地には至るところに雨裂が発達し、荒地・悪地と化している。農民は所有する耕地の四周に溝を切り、掘りだした土で土壁を築いているが、これは耕地への家畜の侵入を防ぐ役割のほかに、地下水の涵養と土壌の流失防止のためである。

自然植生は、乾性サバナで、塩基性土壌に強い耐乾性の植生が見られる。樹木は、バブール(Babool, *Acacia arabica*)、ケジュラ(Khejra, *Prosopis spicigera*)等、草はジョージョロ(Jhojhrro、日本のカヤに類似、主にラクダの飼料や屋根藁、燃料に利用)やクーベ(Qube、塩分に強く、主に家庭用燃料)等が目立つ<sup>11)</sup>。栽培牧草のない本村の家畜飼育は、飼料基盤を村落共同放牧地に求めたいところであるが、そこは現在、ロード・クリシュナの時代と異なり、極端に草生力の衰えた荒地となっている。最近、零細な農民や土地なし世帯等による山羊飼育が盛んになっているが、彼らは乾燥に強いアカシア系のバブールや塩基性土壌に強い草生植物、農産物の残り屑に大きく依存している。

## 2 村の概史と集落パターン

村の主集落 (Abadi) にあるアルシャト・マタ寺院は、伝説上のチャンド王 (Raja Chand) により建設されたとされるが、このチャンド王こそ9世紀のグジャー王国のボージャ王と推定されている。寺院は12世紀のムスリム侵略者によって徹底的に破壊されるが、その後しばらくしてブラーマンの子孫たちが村に帰り、グジャーがそれに続く。それは、5代前の約150年前頃とされる<sup>12)</sup> 言語、風俗・習慣において、U.P.州の西部とよく似ており、婚姻その他による転入者には、州内のアルワール (Alwar) やバラトプール (Bharatpur) についてU.P.州のマツーラが多い<sup>13)</sup>。

村内には中央にある主集落の他に、北部にカッチ・ダニ (Kach Dhani, カッチ小村)、南半部にグジャー・ダニがいくつか散在する。主集落に

は、南北に走る幹線道路沿いにはブラーマン (Brahman, 祭司, 地主) が住み、3本の東西道路が合わさる西端にアルシャト・マタ寺院や小学校、集会場があり、付近にクマール (Kumhar, 土器造り) の居住区がみられる。一方、集落の東側には村役場 (Panchayat Office) や農業協同組合事務所の他、措定カースト (以下 SCs と略称) のチャマール (Chamar, 皮革・清掃) や指定トライブ (以下 STs と略称) のミナ (Mina, 村番・監視) 世帯が住んでいる (図4)。なお、アルシャト・マタ寺院の南には、ラジプート (Rajput, 戦士, 地主) やバンギー (Bhangi, 清掃) の新住居が設けられている。土地改革によって所有耕地の大半を失ったブラーマンの他にグジャーなどの地主の中には、1980年代から主集落を離れて自作地に移り住む例がみられ主集落内に空き家が散見される。

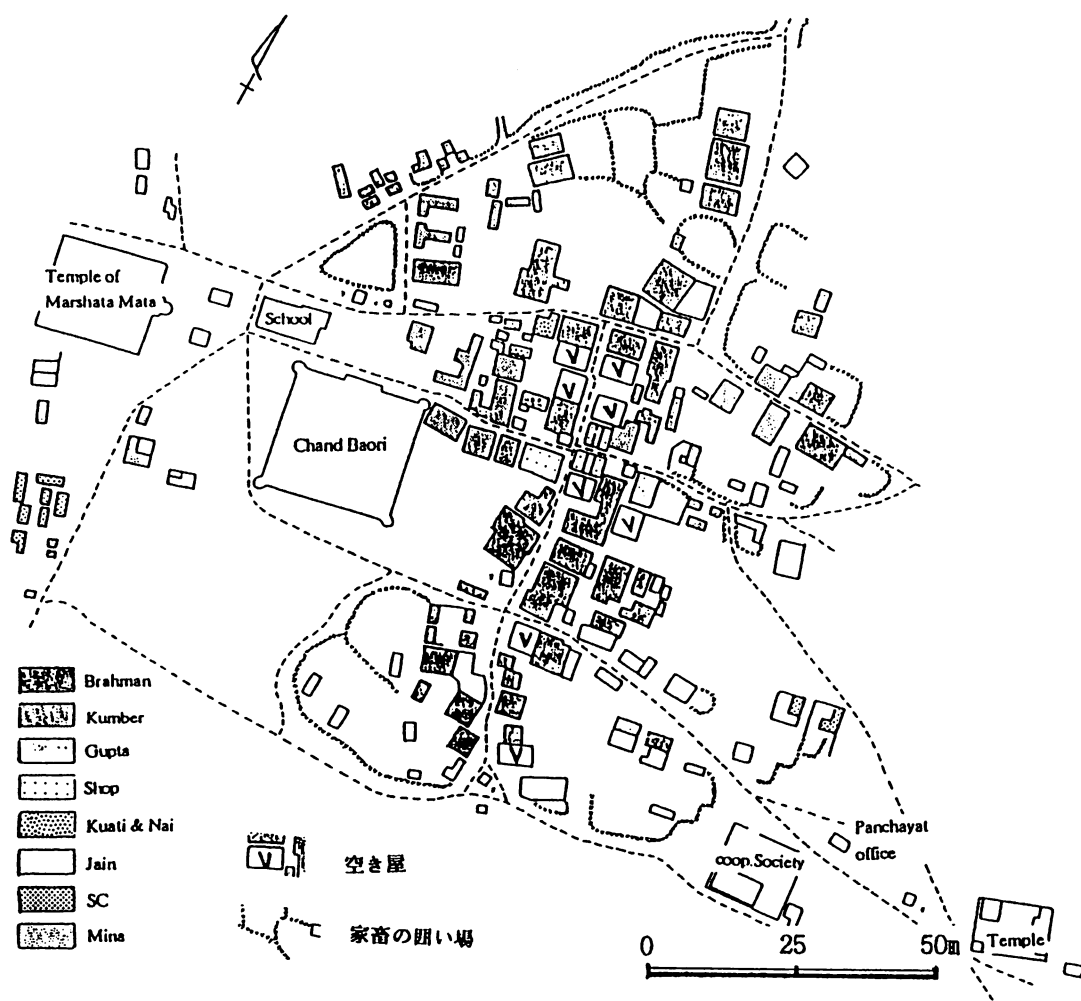


図4 主集落内のジャーティ別家屋配置 (資料: 藤原健蔵作成, 1988)

### 3 世帯・人口構成とコミュニティ

1961年当時から調査時点(1987年)までの26年間、本村の世帯と人口はそれぞれ年率1.2%、2.1%の増加を示した。この増加率はバスワ郡内の村々の平均である。しかし、ジャーティ別世帯・人口数についてみると、かなり特徴ある変化を生じている(表1)。

世帯では、1961年当時主集落の中央部で衣服商を営んでいたマハジャン(Mahajan, 商業)が村外に流出し、逆にSCsのバルワ(Barwa, 靴製造)が流入、またグジャー、マリ(Marli, 野菜栽培)、コーリー(Koli, 布織り)の著増も認められる。しかし、村の有力ジャーティであるブラーマンの世帯数には変わりがない。人口数の変化も、世帯数の変化と同様にコーリー(4.9倍)、マリ(2.6倍)、グジャー(2.1倍)の順に増加が著しい。『村落調査報告』によって本村のジャーティ間のヒエラルキーをみると、最上位にブラーマン、次いでラジプート、グジャー、ジェイン(Jain, 商業)、カティ(Khati, 大工)、ナイ(Nai, 理髪)、クマールそしてSTsのミナ、コリそしてSCsのバルワ、チャマール、最低位にバンギーとなっている<sup>14)</sup>。これらジャーティ間の

序列でいうと、上位のグループのブラーマンとラジプート、下位のバンギー、チャマールには、世帯・人口数の変化が少なく、逆に中間ジャーティでは、一部例外はあるものの著しい増加が認められる。ちなみに、1平方キロメートル当りの人口密度の変化をみると、1961年の214人から1987年は472人と2倍以上になっており、土地への著しい人口圧を指摘できる。

次に世帯規模についてみると、1961年当時、1世帯当り6.2人余りであったものが、1987年には7.4人余りと増加している。また合同家族形態から核家族形態への変化も認められる。農業世帯であれ、賃労働者世帯であれ、核家族の増加傾向がみられる。グジャーの例で言えば、一方では兄弟による均分相続によって核家族化し、農地や家畜等、親の財産が細分化されているが、他方では農地等の細分化が農業経営上必ずしも有利でないとの判断から、従来からの合同家族形態による農業経営を依然として維持している世帯も多い。このことは、本村の地域的条件つまり気候、位置や経済的条件の他に、ブラーマンの村落とも言える長い伝統と歴史をもつ本村固有の事情によるのではないかと推察する。

1961年から1987年の26年間、本村は前述のよう

表1 ジャーティ別世帯、人口数の変化

宗教	ジャーティ	1961年						1987年					
		世帯数	割合 (%)	人 口				世帯数	割合 (%)	人 口			
				計	割合	男	女			計	割合	男	女
1.	Hindu Brahmin	69	42.9	448	44.6	239	209	72	34.3	527	33.9	277	250
	Gujar	35	21.7	199	19.8	112	87	54	25.7	417	26.9	234	183
	Kumhar	16	9.9	72	7.2	36	36	18	8.6	130	8.4	72	58
	Mali	11	6.8	67	6.7	43	24	18	8.6	177	11.4	95	82
	Mahajan	4	2.5	26	2.6	17	9						
	Nai	4	2.5	18	1.8	10	8	1	0.5	2	0.1	1	1
	Rajiput	3	1.9	17	1.7	7	10	4	1.9	32	2.1	17	15
	Koli	3	1.9	14	1.4	10	4	13	6.2	69	4.4	40	29
	Khati	2	1.2	10	1.0	6	4	2	1.0	15	1.0	8	7
	Bohara							1	0.5	6	0.4	2	4
	その他							2	1.0	13	0.8	6	7
	S.C Barwa							15	7.1	79	5.1	42	37
	Chamar	8	5.0	59	5.9	27	32	4	1.9	29	1.9	17	12
	Bhangi	2	1.2	19	1.9	11	8	2	1.0	21	1.4	12	9
S.T Mina	2	1.2	38	3.8	19	19	3	1.4	29	1.9	17	12	
2	Jain	2	1.2	18	1.8	9	9	1	0.5	7	0.5	4	3
合 計		161	100.0	1005	100.0	546	459	210	100.0	1553	100.0	844	709

(資料：1961年は Village Monograph, 1987年は現地調査)

に、著しい人口増加をみなかった反面、新たなジャーティの流入をみている。このことは何を意味するか速断できないが、次のような推論が成り立つ。すなわち、本地域は、人口稠密なガンガ中流域の農業地帯にあってデリー、アグラの大都市に近く、一方ラージャスターンの乾燥地域との接触帯でもある。そのため、人口稠密地帯からの移住者や乾燥地域からの世帯の流入がある反面で、季節的・恒常の出稼ぎや世帯ごと転出も多いと見なされる。なお、この件に関しては後述するので、ここでは村内外移住や出稼ぎ等による人口移動が比較的激しい村であることを指摘するにとどめたい。

ジャーティの中で人口増加が顕著なのはグジャーであるが、彼らは独自の休憩所 (*Bethak*) を村内につくり芸能者 (太鼓打ち等) を抱えるなど、一つのコミュニティとしてのまとまりが強い。また、周辺の12ヶ村落とカースト・パンチャヤット (*Caste Panchyat*) を有しており、コミュニティとしての団結は極めて強い<sup>15)</sup>。こうしたジャーティ・コミュニティによる団結は、祭礼その他日常的な慣行において維持され社会的政治的な行動、例えば村会議員 (*Panchyat Member*) やその長 (*Sarpanch*, 村長) の選挙での投票行動でいかに機能してくる。地方行政政策の基本単位として1959年に誕生した行政村は、その後の農村開発諸計画の実施過程で重要な役割を果たしてきたが、その中で強固なジャーティ・コミュニティの存在は無視し得ない問題である。

### 3. 耕種農業と牧畜業の展開

#### 1 天水農業による雑穀生産と家畜飼育

調査村の農業は、モンスーン降雨に依存する天水農業 (*Rainfed Farming*) を基本とし、それにわずかばかりの井戸灌漑が組み合わされていた。家畜は、主に耕起や運搬川のゼブ牝牛と搾乳・繁殖用のゼブ牝牛 (*Cow*)、さらに搾乳用の牝水牛 (*She Buffalo*) であり、それに中家畜の山羊と羊が土地なし世帯等の特定のジャーティによって飼育されていた。この点、本村は東部ラージャスターン州の典型的な農村と言える。本村は半乾燥・熱帯ステップ地域にあるので、その伝統的農業システムは、ベルンド・アンドレー (*Andreae, B*) の言う“草地 (*Grassland*) システム”として位置づけられるが、現在は、人口圧の高まりの中で“1年生作物栽培 (*Annual-Cropping*) システム”へと転換している<sup>16)</sup>。

#### 1) 耕種農業

『村落調査報告』により1961年当時の農業状況について以下検討する<sup>17)</sup>。村域の約52%を占める602エーカー (243.8ha) が耕地で、そのうちの23.8%が灌漑耕地であった。この他、放牧地 (林地を含む) が228エーカー、非耕地面積が224エーカー、土壌流出などによる耕作不能な荒地 (*Banjar, Waste Land*) が70エーカーであった。共同利用できる放牧地や荒地が比較的広く存在していたが、その利用転換はほとんどなされていない (表2)。

作付作物は、モンスーン降雨による非灌漑耕地での雑穀と豆類、特にバジラ (*Bajra*, トウジンビエ) とムーン (*Moong*, グリーン豆)、乾季には非灌漑耕地に豆類、灌漑耕地に小麦・大麦が栽培されていた (表3)。その当時の作物栽培の特徴は、作付面積で見るとラビー季の作付とラビー季のそれはほぼ等しくなっていることとラビー作の46%が灌漑されていることである。モンスーン降雨期のラビー作物は全耕作地の48.7%しか作付されておらず、当時よりラビー季の灌漑がかなり進んでおり、モンスーン降雨依存の天水農業として性格づけるのは早計である。また、村域の農地がラビー作 (293エーカー)、ラビー作 (309エーカー)、及び集落・非耕地面積を除くその他面積 (330エーカー) とに3等分された利用を推察させるが、これを三圃式類似農法として特徴づけるには問題が残る<sup>18)</sup>。休閒地と家畜飼育とによる地力維持方式の確立をめぐる問題は、1940年代の混合農業 (*Mixed Farming*) 論争の中心課題の一つであったと言えよう<sup>19)</sup>。

1961年当時の農作業の様子を前掲『村落調査報告』によって再現する<sup>20)</sup>と、ラビー作は、6月15日頃から始まり、まず堆肥搬入や耕起が行われる。そして除草をし耕地をならして、モンスーン降雨を待つ。そして最初の雨で種を蒔く。播種は6月終わりまでの2週間、トウモロコシ、バジラ、豆類が主要作物である。これらの耐乾性作物は、平年並の降雨であれば灌漑なしで十分な収穫ができるし、砂壤土 (*Sandy Loamy Soil*) にも良く適応する。8月は除草作業で汗をかくが、9月になると暇ができ、10月の豊年を期待する。一方、ラビー作の農作業は、ラビー作の刈り取り後直ちに始まる。すなわち、11月に3回の耕起を行い、それを均して月末までに種を播く。作物は、灌漑を必要とする小麦と大麦、必要としないグラム豆である。12月から1月の間、除草を必要とするが、ラビー作ほど忙しくはない。2月の

表2 土地利用面積の変化

(単位: acre)

カテゴリー	1961年	(%)	1986年	(%)
灌漑耕地	143	12.3	325	27.8
非灌漑耕地	459	39.6	433	37.1
休耕地	31	2.7	30	2.6
放牧地	228	19.7	83	7.1
荒地	70	6.0	145	12.4
集落地	3	0.3	3	0.3
非耕地	224	19.3	148	12.7
合計	1158	100.0	1167	100.0

(資料: Village survey Monograph, 1961. 1986-87年土地台帳)

表3 作物別作付面積の変化

カテゴリー	1961年			1986年		
	灌漑耕地	非灌漑耕地	計	灌漑耕地	非灌漑耕地	計
1. 雑穀		142	142	44.6	397.4	442.0
2. 豆類		84	84		172.8	172.8
3. 飼料作物		14	14			
4. 油料種子		5	5		5.0	5.0
5. タバコ	2		2	2.5		2.5
6. その他		46	46	2.5		2.5
計	2	291	293	49.6	575.2	624.8
ラビー						
1. 小麦	32	5	37	170.4		170.4
2. 大麦	62	2	64	81.5		81.5
3. 豆類	6	149	155	2.5	182.8	185.3
4. その他	42	11	53	5.0		5.0
5. 油料種子					44.5	44.5
7. 飼料作物				22.2		22.2
計	142	167	309	281.6	227.3	508.9
合計	144	458	602	331.2	802.5	1133.7

(資料: 1961年は Village monograph, 1986年は Patwaridata)

農閑期に休んで、3月の刈入れに備える。4月も脱穀と市場への搬入で忙しい。5月1日から6月15日までの酷暑季は農閑期であり、この時期には社会的な儀式や農産物の販売が行われる。もし、十分な灌漑耕地を有する農家であれば、6月中旬から翌年の4月終わりまでの10ヶ月半が農繁期と言える。しかし本村では、そのような農家はない。ラビー作のために畑を鋤く回数は1回であったが、3回に増し、また深く耕すようになったといわれる。鋤は、パプールの木で村の大工によって作られ、バンディクイ町で購入された鉄製の鋤先がつけられる。

## 2) 牧畜業と季節的家畜移動

本地域のような不安定で低位生産を余儀なくされている雑穀農業にとって放牧地・草地の利用は極めて重要である。それ故に、本地域はこうした放牧地を利用して牝牛を飼育し、ミルク文化を形成してきたのである。本村には、現在、3ヶ所の共同放牧地（北部2ヶ所と南部1ヶ所）がある。その所有権は州政府にあるが、村が管理し、村内外の誰もが家畜の放牧や鋤などの原木を得ることのできる入会地の性格をもっている。しかし、現在はウシの飼料には向かない有刺植物が生え、それを食べることができない山羊やラクダが放される程度である。調査をした1987年のカリーフ季

は、100年来の大干ばつということもあって、いずれの放牧地にも家畜の姿が見られなかった。しかし、平年でも草はあまり生えないらしく、村人は「草が無いから放牧はしない」と言うだけである。現在のところ、放牧地の改善を図る計画は もちろん、それを話題にする様子は村会にも農民にも見受けられない。村の管理下にある共同放牧地の生産力回復は、村の牧畜経済の振興にとって基本的かつ緊急の課題であると言える<sup>21)</sup>。

1961年の『村落調査報告』によれば、当時の家畜と放牧地の状況を次のように記述している。「村人は、拠点村落振興策 (Key Village Scheme) や人工授精センターの存在を良く知っているが、家畜の改良には関心を示さない。また、家畜の病気治療のために、バンディクイ町にある家畜保健所 (Veterinary Hospital) に行かない。そして、乳牛 (含む水牛) にもトウモロコシやバジラ、干し草を与えるが、ミルク生産に効果のある生草を与えることはしない。放牧地の面積の増加は考えても、それはミルク生産の増加を目的にしたものではない。もし、雨季に共同放牧地へ牛を放さず草の成長を待たなければ、それ以後の8ヶ月の飼料は賄える。しかし、村人は放牧地の改良・管理に無関心であり、牧養力を高める努力は何もしていない。彼らはまた、政府認可の酪農振興策 (Dairy Schemes) や州政府による補助金や貸付金について知っているが、誰も利用しようとしないうし、飼育頭数を増やそうとしない。村人は、牛糞が堆肥に有効であることを知っているが、薪が不足しているため、牛糞を薪がわりに利

用する昔からの習慣を変えようとしないうし。そのため、厩肥の利用がみられない。」<sup>22)</sup>としている。

このような本村の共同放牧地の悪地化による牧養力の低下は、最近のことではなく、かなり以前からのことである。また、本地域一帯は、牧畜業の盛んなラージャスターン州西方の乾燥・半乾燥地域と農耕の盛んなヒンドスターン平原中部との間に位置し、古くから家畜の季節移動のルートであった。本村でも、4月から6月の酷暑季には、西からグジャー、モスリムやバンジャラ (Banjara, 行商・家畜販売) などの牧畜民や移動商人が草を求めて羊と牛を連れて村を通過する。またモンスーンの終わる9月から10月には耕起・運搬用に仕立てたバロックを家畜市場などで販売するため、西から東へ移動する。バンディクイ町での家畜市場には、西の売り手、東からの買い手商人が集まる<sup>23)</sup>。一方、東から西への季節的家畜移動も小規模ながらみられる。毎年5月に10日間ほど、東のガラガオン (Gharagaon) やバトプールから羊や山羊が本村へ流入し泊まる。3月や11月に来村する年もある。初めてのケースと村人は言うが、1989年10月には、北部のアルワール県のラジガール (Rajgarh) から、10人ほどの牧畜民が500頭余りの羊・山羊を連れて10~12日間滞在した。雨が降らず飼料がなくなったための移動で、滞在期間中は本村の酪農協同組合に山羊ミルクを販売した (表4)。

以上のように、本村は昔から季節的家畜移動の通過地であり、その通過の折りに共同放牧地が他村の牧畜民にも利用されてきた。そのため、放牧

表4 水牛, 山羊ミルク販売 (1989.10.19)

番号	人名	ジャーティ	重量 (kg)	価格	販売額 (Rs)
1	Bajaranglal	Brahmin	7.0	*4.28	29.96
2	Hari Singh	Gujar	3.5	*4.03	14.11
3	Moti	Gujar	12.0	1.90	22.80
4	Ghasilal	Gujar	10.0	2.15	21.50
5	Lallu	Gujar	21.5	2.20	47.30
6	Prabhu	Gujar	16.0	2.35	37.60
7	Bhambu	Gujar	4.0	2.10	8.40
8	Pabudan	Gujar	5.5	2.10	11.55
9	Ghasi	Gujar	10.2	2.10	21.42
10	Ramkisan	Gujar	23.0	1.90	43.70
11	Bubban	Gujar	4.5	2.25	10.13
12	Heera	Gujar	4.2	2.35	9.87
合計			121.4		278.34

(注1) 3から12まではアルワール県下の牧畜民で、今年初めてアバネリ付近にやってきて山羊のミルクを販売した。

(注2) \*は水牛のミルク、それ以外は山羊のミルク

(資料: アバネリ酪農協同組合資料)

地の維持に村費を使用することができず、管理もおろそかになり牧養力低下につながったと解される。

前述のように、家畜飼育の改善に対する村人の熱意は、1961年当時はきわめて低いものであったが、1987年調査では以下に詳述するように、大きく変化していた。すなわち、ミルク生産に関心が高まり、飼育はゼブ牛中心から搾乳用牝水牛中心に変わり、しかも頭数増加の意欲を寄せている。また、近年とみに数を増している灌漑井戸や、ダルマート信仰により建設された「水のみ場」<sup>24)</sup>によって、家畜の飲み水が安定的に確保されるようになり、これらも飼育頭数の増加に少なからず貢献している。

### 3) 牧畜カーストとしてのグジャー・コミュニティ

本村における家畜飼育をみると、牧畜カーストとして知られてきたグジャー・コミュニティの存在を無視することはできない。グジャーの呼称や成立起源については、いろいろな見解がある。「紀元後5世紀頃、西方から移住してきた中央アジアの牛飼育民、後に牛泥棒の名を帰せられたトライブのインド風の名前がグジャーである」、「スキタイ系のトライブで、ペルシア語のグルグ(Gurg) にちなんだもの」、「北方からの侵入者

で、紀元前4世紀頃から10世紀にかけて度々インドへ侵入を繰り返し、最終的には現在のグルジア共和国(Georgia, ペルシア語で言うグルジスタン, Gurjistan) から移り住んできた人々」等の所説があるが、現在では、グルジア共和国からの人々とする説が認められているようである<sup>25)</sup>。前述の地理学者カタナ(Khatana, R.P)は、インド亜大陸へのグジャーの移動を図5に提示している<sup>26)</sup>。

1881年のセンサス調査では、インド亜大陸に住むヒンドゥー・グジャーの人口は140万人余りとされ、主として、当時の行政区のパンジャープ(62.7万人)、ラジプターナ(40.3万人)、中央インド(33.7万人)等に定住していた。その他に、ムスリム教徒やシク教徒になったグジャー系住民が、約200万人を数え、パンジャープを中心にして住んでいたと言われる<sup>27)</sup>。

本村の在るラージャスターン東部には「グジャー村」と呼ばれる集落が数多く見られるが、その多くはアラバリ山地の麓に分布している。それらは、現在のグジャラートから山麓沿いの草地を伝って家畜群を連れて北上してきたグジャーが、その途中の適当な土地や遺棄されたヒンドゥー集落に定着したものと考えられている<sup>28)</sup>。この他、グジャー村は現在のジャム・カシミール州にも多く移牧民として生活している。

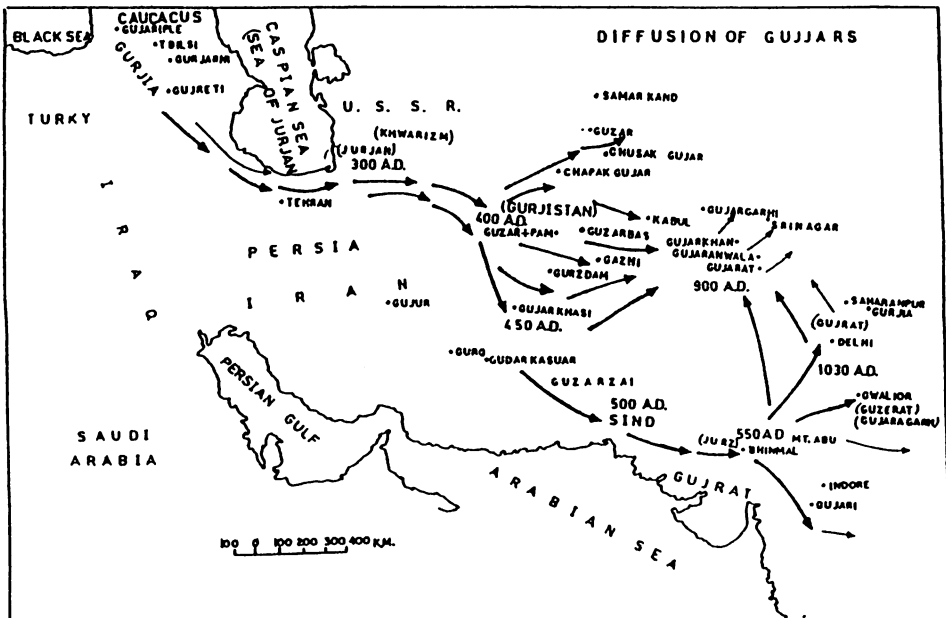


図5 グジャーのインド侵入経路 (資料: Khatana, 1991)



## 2 井戸灌漑農業の展開

1961年当時、村内には17ヶ所の井戸があったが、そのうちの6ヶ所は主集落内にあって、飲用その他生活用水に使われていた。灌漑井戸は11ヶ所に過ぎず、わずか143エーカーを灌漑していた<sup>29)</sup>。調査時点では、主集落内の井戸を除いても29ヶ所を数え、新規の井戸は1980年代に入ってから掘られたものが多い。図6は、村内の井戸分布を1961年当時と調査時点でみたものである。井戸の新設が顕著であったのは、村域の北半分であり、その多くは、住居を主集落から耕地へ移動させたグジャー、ラジプート、ブラーマン世帯であり、比較的資力があり農業経営に本格的に取り組んでいる農家である。

インドにおける「緑の革命」の主役は、最初は小麦であるが、1970年代後半から、米が加わる。しかし、本村ではさらに遅れて導入されたバジラの高収量品種（High Yielding Varieties, 以下HYVと略称）が重要である。バジラは、耐乾性に優れ、モンスーン限界地域かつ不安定な降雨でも育つカーフ作物である。必ずしも灌漑や農薬散布を必要としないことから、このバジラ生産の飛躍こそが、本村にとっての“緑の革命”を意味すると言える。バジラのHYV（Gujarat, Andhra Pradesh 種）はバンディクイヤシカンドラ（Sikandra）町の農業協同組合を通じて、導入された。これらは在来品種より、栽培期間が25日前後短く、単位収量は50%程度多い<sup>30)</sup>。カーフ作の収穫が早まることは、ラビー作の植え付けを容易にする。このことは、インドの耕作システムに重要な意味をもたらす。つまり、北インドで一般的に見られることであるが、灌漑施設が整備されると、ラビー作が多くなり、それに伴ってカーフ作が逆に減少する。その理由は、高温、湿潤の気候条件下のカーフ作は除草の手間がかかり病虫害の被害も多いからである。しかも、モンスーン降雨はしばしば強風を伴うので、カーフ作であるバジラやジョワールは倒伏その他の風害を受けることが多い。そのため、地上部の安定した乾季の方が、捻実作物の栽培にとっての適期となる。本村においても最初のHYVのバジラ導入により小麦のHYV（Kalyan Sona 種）が栽培されるようになり、ついで1980年代中頃にさらに栽培期間の短いHYV（Sonalica 種）が、さらに少し遅れてトウモロコシのHYV（Shankar 種）の導入が行われた<sup>31)</sup>。

HYVの導入は、化学肥料の施肥量の増加や農薬の散布を随伴した。本村でも、1960年代後半に

は窒素を中心とする化学肥料や日本では禁止されているエルドリン（Eldrine）が使用され、1970年代以降にはBHC等の農薬が播種時に投入されている<sup>32)</sup>。また、1970年代前半にトラクターが、それより10年遅れてスレッシャーが導入された。これらは、ゼブ牝牛に依存していた伝統的な耕起や脱穀の一部にとって代わった。ちなみに、本村落では4台のトラクターが稼働している。

1986年時の本村の灌漑面積は325エーカーであり、1灌漑井戸当りの灌漑面積は平均15エーカー程度である。バロック揚水から電気揚水への転換は進展したが、1井戸当りの灌漑面積は1961年当時と大差ない。井戸灌漑は用水路灌漑と比べると小規模ではあるが、小回りが効くので、季節に応じて出荷できる市場性の高い多様な作物の栽培が可能となる。しかしコストの高く付く灌漑方法である。前掲表3によって1961年と1986年の作付作物と面積の変化の特徴を見ると、次の2点が挙げられる。

①穀物の作付面積の大幅な増加が認められ、それはカーフ作のバジラだけでなく、ラビー作の小麦・大麦についても言える。穀物作付面積の総作付面積に占める割合が、1961年の40.4%から61.2%に上昇したこと、②バンディクイ町に近いカッチ地区での野菜栽培（カボチャ・スイカ等）の他、飼料作物（青刈りジョワール等）、油料種子（カラシ菜、ゴマ等）等の栽培が村内全域で行われるようになったことである。

## 3 階層別農家群とコミュニティ

既述の通り、本村は新たに井戸を掘り、小規模ながらも灌漑面積を拡大する方向で耕種農業を展開してきた。

こうした耕種農業の担い手は、ドミナントカーストのブラーマンではなく、かつて小作農であり、小規模な自作農にすぎなかったが、1959年の「土地地主廃止法」<sup>33)</sup>によって農地を手にしたグジャー農民である。この「土地地主廃止法」施行直後の1961年当時には、村内の耕地の多くはブラーマン・コミュニティによって所有されていたが、1987年には全耕地面積の過半がグジャー・コミュニティによって占められるまでに変化した。しかもこの期間、世帯当りの所有規模を拡大した唯一のジャーティはグジャーであり、1世帯平均8エーカー余りという数字はブラーマンのその倍以上の規模である（表5）。

耕地を所有する62世帯を、所有規模で上層（14エーカー以上）、中層（7～14エーカー）、下層

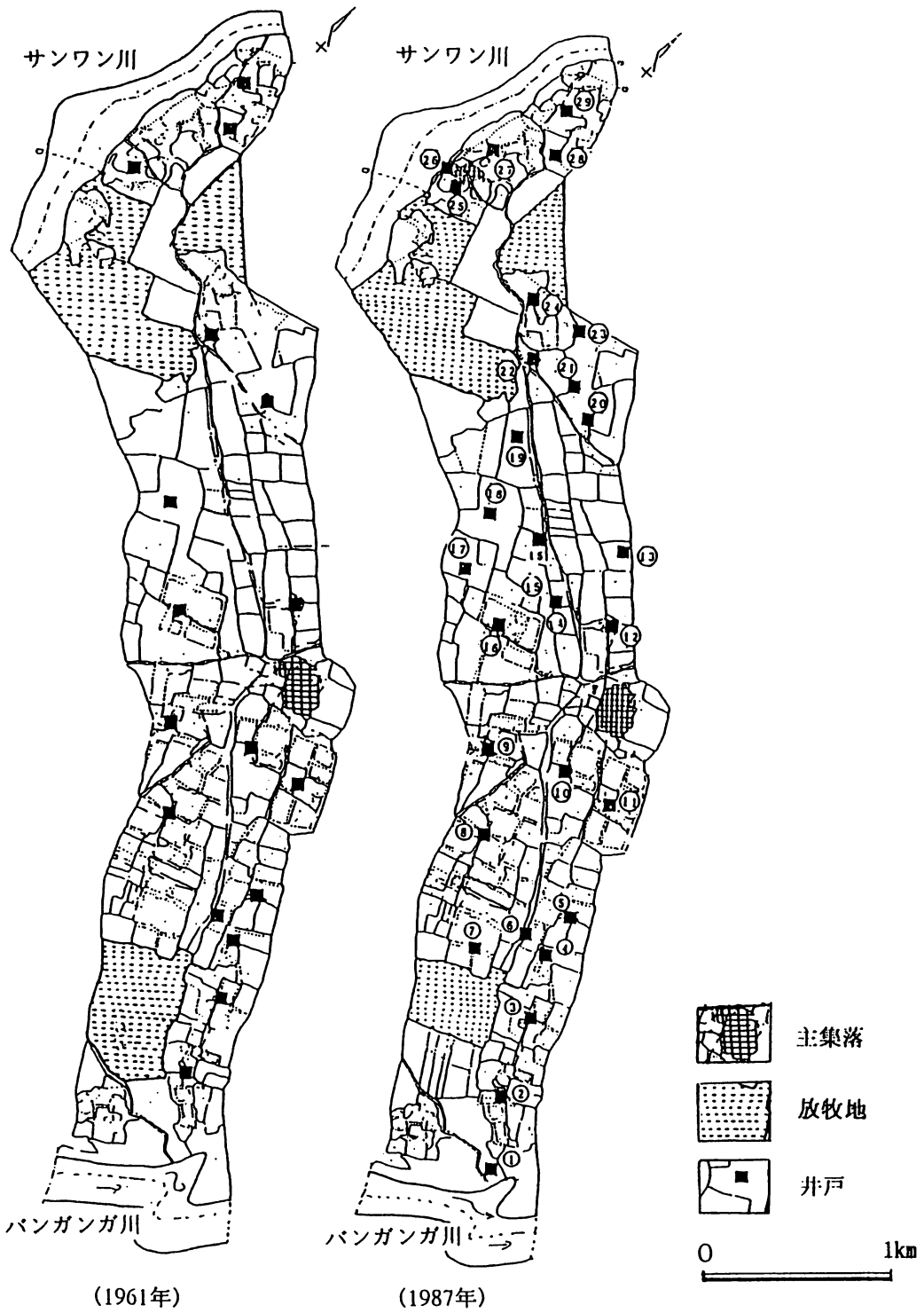


図6 井戸の分布

(資料：藤原健蔵・牧野一成作成，1988)

(3.5～7エーカー), 零細層 (3.5エーカー未満) の4階層に分け, 各階層の経営状況を示したのが表6である。

この表から読み取れる特徴は, ①上層農家群12世帯)の中の9世帯, 中層農家群 (17世帯)の11世帯が, グジャーであること, ②上・中層農家群が所有する耕地の灌漑率は, 下層・零細農家群のそれを10%余り上回っていること, ③耕地規模が大きい階層ほど家族規模も大きく, 両者はよく対応していること, ④上・中層農家群は耕種農業だ

けでなく, 家畜飼育 (ウシ, 山羊・羊) においても下層・零細農家群のそれを大きく上回っていること, ⑤旧地主層であるブラーマン・コミュニティの農業分野における地位や指導性は, 著しく低下していること, ⑥耕地を所有しない世帯群でも, 僅かながら搾乳ウシやロバ, 豚, ニワトリなどの飼育が見られること, 等である。

以上を要約すると, 本村における土地所有形態は, 1961年以降, ブラーマンとグジャーの両コミュニティ間を中心にして大きな変化を遂げてき

表5 ジャーティ別土地所有面積の変化

(単位: エーカー)

ジャーティ	1961年			1987年		
	所有耕地 総面積	割合 (%)	世帯当り 所有面積	所有耕地 総面積	割合 (%)	世帯当り 所有面積
Brahmin	349.70	(39.6)	9.38	254.80	(29.5)	3.54
Gujar	280.63	(31.8)	7.50	434.70	(50.4)	8.05
Mina	81.88	(9.3)	40.63	23.74	(2.8)	7.91
Mali	48.75	(5.5)	4.38	64.72	(7.5)	3.60
Mahajan	35.00	(4.0)	8.75	-	-	-
Chamar	25.63	(2.9)	3.13	24.22	(2.8)	1.27
Kumhar	21.25	(2.4)	1.25	23.44	(2.7)	1.30
Bhangi	18.75	(2.1)	9.38	2.00	(0.2)	1.00
Rajput	13.13	(1.5)	4.38	16.08	(1.9)	4.02
Khati	5.00	(0.6)	2.50	6.00	(0.7)	3.00
Nai	2.50	(0.3)	0.63	3.00	(0.3)	3.00
Jain	1.25	(0.1)	0.63	0.00	(0.0)	0.00
Bohara	0.00	(0.0)	0.00	6.00	(0.7)	6.00
Koli	0.00	(0.0)	0.00	3.72	(0.4)	0.29
その他	0.00	(0.0)	0.00	0.00	(0.0)	0.00
合計	883.47		5.49	862.42		4.11

(資料: 1961年は Village Monograph, 1987年は Field Survey)

表6 農家階層別所有耕地, 家畜状況

農家 カテゴリー	世帯 数	ジャーティ別 世帯数	世帯 人数	総耕地 面積	灌漑 耕地	牛		水牛		ウシ 頭数	ヒツジ 頭数	ヤギ 頭数	ロバ 頭数	
						総頭数	オス	総頭数	メス					
上層農家	12	G9, B2, M1	計	136.0	241.1	176.7	35.0	21.0	61.0	55.0	96.0	30.0	74.0	0.0
			平均	11.3	20.1	14.7	2.9	2.1	5.1	4.6	8.0	2.5	6.2	0.0
中層農家	17	G11, B4, M1, Be1	計	166.0	165.3	122.3	60.0	36.0	104.0	93.0	164.0	65.0	87.0	0.0
			平均	9.8	9.7	7.2	3.5	2.1	6.1	5.8	9.6	4.1	5.1	0.0
下層農家	66	B27, G24, M9, R3, Bo1, Be1, K1	計	563.0	327.9	214.7	120.0	68.0	207.0	193.0	327.0	34.0	110.0	4.0
			平均	8.5	5.0	3.8	1.8	1.7	3.1	3.3	5.0	0.5	1.7	0.1
零細農家	67	B26, K10, G9, Ma5, Be5 Ko3, Bh2, Ch2, Kh2, 他3	計	166.0	165.3	122.3	60.0	36.0	104.0	93.0	164.0	65.0	87.0	0.0
			平均	9.8	9.7	7.2	3.5	2.1	6.1	5.8	9.6	4.1	5.1	0.0
土地なし	48	B13, Ko10, Be8, K7, Ma3, CH2, 他5	計	226.0	0.0	0.0	12.0	2.0	27.0	26.0	39.0	2.0	21.0	23.0
			平均	4.7	0.0	0.0	0.3	1.0	0.6	2.2	0.8	0.0	0.5	0.5
平均 合計	210		計	7.4	4.2	4.3	1.4	1.7	2.4	3.3	3.8	0.7	1.7	0.1
			平均	1152	869.2	585.9	295.0	153.0	502.0	462.0	797.0	140.0	358.0	27.0

(資料: 1987年現地調査による)

(注) G; Gujar B; Branmm M; Mina Ba; Barwa R; Rajput Bo; Bohara K; KUmhar Ko; Koli Ma; Mali Ch; Chamar Kh; Khati Bh; Bhangi

ており、その変化はグジャーの自作農化と経営拡大をもって端的に表現することができる。しかも、彼らは、前述したように、耕種農業と家畜飼育を結合させることにより、経営の安定的拡大を図ってきた。例えば、均分相続による農地細分化を避け、合同家族の形態を残し自家労働力の確保を図ってきた。その1例をあげると、13エーカーの耕地と多くの家畜（ウシ25頭、羊・山羊40頭）を飼育するこの農家は、3世帯同居の18人、4組の夫婦・子どもからなる典型的な合同家族である。兄弟たちは、実際に農地・家畜を均分相続し、かまどを別々にしながらも、農作業や家畜の世話などでの相互依存の関係を維持している。世帯主とその弟及び子ども夫婦たちは灌漑耕地で集約的な耕種農業に励むとともに搾乳ウシや羊・山羊の飼育に工夫をこらし、専業農家として家計を維持している。ここで行われている農業は明らかに混合農業である。それは、家畜糞尿を積極的に耕地に還元して地力維持を図っているし、また、家畜生産物からの収入は家計の上で重要な位置を占めているからである。

#### 4. 就労機会の多様化

##### 1 就労形態の変化

表7の通り、1961年の総世帯161戸の職業別世帯数は、自営農業が88世帯、農業労働が56世帯、商業5世帯、家内工業12世帯である。自営農業世帯をジャーティ別に見ると、その88%余りをブラーマン46世帯とグジャー32世帯が占めている。次に男子就労者（315人）について見ると、自営農業者217人、雇用農業労働者23人、その他の生

産への就労者15人、その他が60人となっており、自営・雇用の農業就労者の合計が76.2%を占めている<sup>34)</sup>。これらの数値から、本村の就労構造は基本的に農業部門に立脚していたことが知れる。しかしながら、その後の四半世紀の間に事情は大きく変っている。というのも、1987年の現地調査では、男子総就労者425人のうち、農業就労者（自営222人、雇用17人）が56.2%となり、1961年当時に比べて20%余りの低下となっているからである。本村の就労構造に大きな変化が認められるのである（表8）。

そこで村の農業部門の内部外部でどのように展開しているのかについて検討することにする。まず農業部門内部について見ると、1961年当時の耕種農業と家畜飼育の状況は、自営農業を本業（Primary Occupation）とする世帯が、ブラーマンで46世帯、グジャーで32世帯であった。家畜飼育を本業とする世帯は皆無であったが、副業（Subsidiary Occupation）としている例はブラーマンで60人、グジャーで30人を数えていた。この数字は、雇用農業労働者数とほぼ同等であり、家畜飼育が本業と言われないまでも当時の重要な職業であったことをうかがわせる。家畜飼育に就労する男女の割合は知れないが、恐らく女性が多かったのではないかと推察される。特にブラーマン世帯では自営農業が多い反面、その3分の1の世帯が雇用農業労働となっており、当時すでにブラーマン・コミュニティ内部における経済的格差が進んでいたことがわかる<sup>35)</sup>。

ブラーマン、グジャー以外のコミュニティについて見ると、自営農業を本業とする世帯はマリが5世帯、チャマール2世帯、ミナ2世帯、マハ

表7 1961年職業別世帯数

(1961)

ジャーティ	本 業				副 業		
	農 業	農業労働	商 業	工 業	農業労働	農 業	牧 畜
1 Brahmin	46	23			46	4	60
2 Gujar	32	3			32	3	30
3 Kumhar		6		10	10	2	
4 Mali	5	6			5	6	
5 Chamar	2	6			2	6	1
6 Mahajan	1		3			3	
7 Nai		4				1	
8 Rajput		3				1	2
9 Koli		3					
10 Jain			2			2	
11 Khati				2		1	
12 Mina	2						
13 Bhangi		2				1	

(資料：Village monograph, p.20)

表8 ジャーティ別就労者状況

a) 就労者

宗 教	ジャーティ	世 帯 数	人 口 数		就 労 者																				
					合 計						自 営								雇 用						
											農 業		牧 畜		カースト		専門営業		零細営業		臨時的		恒常的		
					計	男	女	計	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女			
H	Brahmin	72	527	277	250	177	143	34	67	34					1	0	2	0	19	0	20	0	34	0	
	Gujar	54	417	234	183	145	118	27	97	27	9	0									4	0	8	0	
	Kumhar	18	130	72	58	46	41	5	17	3			6	1							17	1	1	0	
	Mali	18	177	95	82	61	45	16	27	16									2	0	15	0	1	0	
	Koli	13	69	40	29	20	19	0	0	0											19	1	0	0	
	Rajput	4	32	17	15	6	6	0	3	0														5	0
	Khati	2	15	8	7	5	3	2	0	2					3	0									
	Bohara	1	6	2	4	1	1	0	1	0															
	Nai	1	2	1	1	0	0	0	0	0															
	その他	2	13	6	7	4	3	1	0	1									1	0	1	0	1	0	
SC	Berwa	15	79	42	37	28	19	3	5	3	1	1									13	5	0	0	
	Chamar	4	29	17	12	14	10	0	0	0					8	4					2	0	0	0	
	Bhangi	2	21	12	9	16	9	0	0	0					9	7									
ST	Mina	3	29	17	12	10	7	3	5	3														2	0
J	Jain	1	7	4	3	2	1	0	0	0									1	0					
		210	1553	844	709	535	425	91	222	89	10	1	27	12	2	0	23	0	91	7	52	0			

b) 未就労者

宗 教	ジャーティ	世 帯 数	人 口 数		非就労者									
					合 計			家 事	就 学		老 人 就		他	
					計	男	女		男	女	男	女		男
					計	男	女	女	男	女	男	女	男	
H	Brahmin	72	527	277	250	351	137	214	129	63	23	67	62	7
	Gujar	54	417	234	183	273	117	156	93	51	2	62	61	4
	Kumhar	18	130	72	58	84	30	54	38	6	0	23	16	1
	Mali	18	177	95	82	116	50	66	31	0	1	49	34	1
	Koli	13	69	40	29	49	21	28	20	4	0	9	8	8
	Rajput	4	32	17	15	24	9	15	12	8	1	1	2	0
	Khati	2	15	8	7	10	5	5	2	2	0	3	3	0
	Bohara	1	6	2	4	5	1	4	3	0	0	0	1	1
	Nai	1	2	1	1	2	1	1	10	0	0	1	1	0
	その他	2	13	6	7	9	3	6	1	0	3	3	2	0
SC	Berwa	15	79	42	37	51	23	28	18	14	0	9	10	0
	Chamar	4	29	17	12	14	6	8	5	1	0	5	3	0
	Bhangi	2	21	12	9	5	3	2	0	0	0	3	2	0
ST	Mina	3	29	17	12	18	9	9	6	4	0	5	3	0
J	Jain	1	7	4	3	6	3	3	1	2	2	1	0	0
		210	1553	844	709	1017	418	599	369	155	32	241	208	22

(資料：1987年現地調査による)

ジャン1世帯と僅かであり、これに対して雇用農業労働を本業とする世帯は30を数えている。なお、これらのコミュニティでは、家畜飼育を副業としているのは僅か3人にすぎないことが注目されるが、これは当時の耕種農業に結びついた役割、つまりゼブ牡牛・役畜飼育が中心であったためと理解される。

1987年の就労構造について見ると<sup>36)</sup>、まず就労者の総数は535人であり、これは総人口の34.4%にすぎない。この数値は、1961年の54.6%より20%も低下している。ただし、この差は、1987年の調査における聞き取りの仕方から起因するものと思われる。つまり、女性の就労についての解答には「家事」が多く、それが「就労なし」として集計されたため、全体の就労者率を下げることになっていると思われるからである。ちなみに、男性だけの就労者率で見ると、1961年の57.7%に対し、1987年では50.4%となっており、その差は僅か7%程度にすぎない。

以上の就労データの特徴を念頭に置きながら、1987年時点の耕種農業と家畜飼育の就労状態について検討する。まず注目されるのは、1987年調査の中に家畜飼育を専業とする世帯が現れていることである。その詳細は後述するが、グジャー男子の9人が家畜飼育を本業としている。この場合の家畜飼育はミルク生産を目的とする牝水牛の飼育を主とするが、羊や山羊の飼育も目立つ。その理由として、バンディクイ町における茶店・製菓業者などの営業用の需要拡大によってミルクの生産が刺激されていること、また羊や山羊の飼育も羊毛や食肉の販売がカティク(Khatic, 屠殺・肉販売者)等と特定業者との強い結合によって発展していることがあげられる。

自営農業には、総就労者の58.1%が就いている。これをコミュニティ別で見ると、グジャーは全就労者の85.5%が自営農業就労者であり、ブラーマンの57.1%を大きく上回っている。この2つのコミュニティで自営農業就労者の72.3%を占め、その他のコミュニティを圧倒している。この限りでは、耕種農業におけるコミュニティ別の自営就労者の状況は、1961年当時と比べて大きな変化は見られない。一方、雇用農業労働において、大きな減少が見られる。村内で働く日雇い労働者をすべて農業労働者とは言えないが、その総数は僅かに17人(クマール8人、ブラーマン4人、コーリー3人、その他2人)にすぎない。1961年当時には、既述の通り雇用農業労働は、自営農業について大きな就労者を抱えていたが、1987年時

点では激減を見ているのである。詳細については後述するが、村内における雇用農業労働の就労機会が少なくなり、替わってバンディクイ町での日雇い労働に就くケースが多くなったものと見られる。農業労働から都市での雑業就労への転移プロセスは明らかでないが、その要因としては、①鉄道交通の要地であるバンディクイ町の都市的成長により労働市場が拡大し、通勤可能なアバネリ村の農業労働者が吸引されたこと、②村内の耕種農業部門での労働集約的発展の方向が環境的に制約されたこと、③土地改革により在村地主としてのブラーマンの所有規模が縮小し、農業労働需要が減じたこと、などが推察される。

その他の自営就労者としては、カースト職就労者、茶店・雑貨商など零細な商店経営者がおり、またバンディクイ町で営業する弁護士と薬剤師の2人がいる。カースト職就労者では、土器・壺造り(クマール, 7人)、大工職(カティ, 3人)、家畜の斃死処理や皮革及び清掃業(チャマール, 12人)、掃除・清掃(バンギー, 16人)などが見られ、これらは1961年当時と大きな変化は見られない。クマールの場合は、ブラーマンやグジャー等の旦那(Jajman)の求めに応じて壺や茶器を製作する奉公人(Kamin)として7世帯が就労している。材料の粘土は、村外の公有地である池から無料で得てロバの背で運ぶ。製品はジャジマンに一定量提供し、余分をバンディクイ町で販売する。村内の30~40世帯のジャジマンからは、年2回ほど20kgの穀物を受けている。一方、ハリジャンの場合を見ると、1人の例であるが、パンチャヤットに1,500ルピーの供託金を納めて、斃死家畜の収集権利(Adhikar)を得、専門的に解体処理して皮革とし、それをバンディクイ町の市場だけでなく、遠くマッラー市まで出向いて販売している。それは、経済的に有利な職業とみなされている。

## 2 都市型雇用の増加

前節で明らかにしたように、村内における耕種農業での労働需要の低下は、大量の村外通勤者や恒常の出稼ぎ者を析出する原因となった。1987年調査によれば村外就労者は、総勢132人を数えた<sup>37)</sup>(表9)。このうち、2人の女性を除く130人はすべて男性である。これを就労地域別に見ると、バンディクイ町が46人で最も多く、ついで州都のジャイプール市が30人、デリー市が14人を数える。バンディクイ町へ通勤する日雇い労働者46人の職種を見ると、5人は石工、建築業、製粉

表9 村外就労者一覧

就 労 地	自 営		雇 用						合 計
	専門営業	零細営業	不 安 定			恒 常 的			
			一般労働	職人技術	その他	政 府	鉄 道	その他	
Bandhikui	1	3	38	9	0	8	3	0	62
Jaipur	0	9	1	2	1	8	6	4	31
Delhi	0	1	6	4	0	2	1	0	14
Calcutta	0	2	2	0	0	0	0	0	4
Ahamedabad	0	0	0	1	0	0	3	0	4
Nagpur	0	0	0	0	2	0	0	1	3
Alwar	0	0	2	0	0	0	0	0	2
Dausa	0	0	0	0	0	1	0	1	2
Sikroda	0	0	0	0	1	1	0	0	2
その他	0	0	0	0	0	7	1	0	8
合 計	1	15	49	16	4	27	14	6	132

(資料：1987年現地調査による)

業、石灰製造といった職人的業種であるが、他の1人を除く40人は日雇いの単純・肉体労働であり、年間で平均3,500~4,000ルピーの収入を得ているにすぎない。彼らのうち17人は、村内に僅かながらも耕地を有し農業を副業としている。以上の他に、バンディクイ町で政府関係や鉄道関連に勤務する者、弁護士と薬剤師として自営する者がおり、ブラーマン村としての教育程度の高さを示している。なお、2人の零細営業者もいる。ジャイプール市での就労者30人の内訳を見ると、政府関係・鉄道・警察など恒常的勤務と、一般労働、工場・商店勤務、力車運転、園芸等への一時ないし日雇いの就労とに分けられるが、いずれの場合でも殆どが、家族を村に残し、週末または月に一度位の頻度で帰村している。村外就労は、以上の他カルカッタ市、アーメダバード市、ナグプール市等の全国規模の大都市及び隣のドーサ町やシクロダ町等が挙げられる。

1987年の全世帯の悉皆調査では、各世帯の年間総収入を聞き取ったが、出稼ぎ・通勤世帯の合計収入は約100万ルピーに達する。これは本村の総収入180万ルピーの55%に相当する。聞き取り調査による年間収入については、情報提供者の態度や就労業種による算定の方法の違いなどによって、その信憑性に問題はあるが、一応、上述の数値に基づいて言えばアバネリ村の経済は村外通勤や出稼ぎによる収入に大きく依存していると結論づけられよう。次に、主な村外就労地別にその実態を見ることにする。

### 1) バンディクイ町

本村からバンディクイ町に通勤している60人余り

は、大半が日雇い労働者である。この町はアラー・アーメダバード線とアグラからの鉄道が落ち合う連結点としてイギリス統治時代に建設された町である。駅構内には、広い操車場や関連施設があり、周辺はイギリス風の学校・病院・教会を含むいわば“鉄道コロニー”となっており、モスクやバザールもある。人口規模(1.6万人、1981調)は小さく、郡役所(Tashil Office)も他の町(バスワ)にあるが、商業や交通、教育・文化機能において郡内最大の中心地である。郡役所こそないが、地区開発事務所(Block Development Office, 以下BDOと略称)をはじめ、警察署、裁判所、郵便局、高等学校、短期大学、家畜保健所等の公的機関があり、またバスセンターや農産物の集荷市場もあり、小売店・食堂が並ぶ商店街の形成を見る<sup>38)</sup>。

このようなインドの同規模の小都市としてやや特異な成立過程をもつバンディクイ町へ、アバネリ村の村人は二つのコースで出かける。一つは村の主集落から未舗装ながら自動車が通れる道を西に5km行き、県道に出た所でバスを拾って町に至る遠廻りコースである。しかし、村人は日常的にはこれを利用せず、村域の北端にあるカッチ集落からサンワン川を渡渉してバンディクイ町に直行するもう一つのコースを選ぶ。この近道を利用すると村の主集落から町へは自転車でも40~50分、牛車または徒歩で1.5時間まで到着できる。したがって、村人は日常の通勤や通学、農産物やミルクの販売に、このコースを利用する。しかし、道幅が狭い上に、乾季には土埃り、雨季には、ぬかるみに足を捕られ、またサンワン川の渡渉も困難となる。

表10a バンディクイ町就労者一覧

世帯番号	ジャーティ	職業	世帯主続柄	人数	就 労 者			世帯主職業	家族形態	世帯人数	就労者数	耕地面積	ウシ頭数
					年齢	学歴	年収額						
1	Brahmin	弁護士	本人	1	50	B.A	12,000	-	B1	8	2	3.00	2
2	Brahmin	仕立業	長男	1	27	B.Cc	1,000	公務員	A13	14	4	6.00	6
3	Brahmin	茶店	長男	1	30	2	6,000	ミルク販	B1	10	3	0.00	3
4	Brahmin	商業	本人	1	40	0	5,000	-	C	4	1	0.75	3
5	Barwa	日雇い	兄弟	2	-	-	7,000	-	C	7	2	0.00	0
6	Barwa	日雇い	本人	1	35	10	4,000	-	C	6	1	0.00	0
7	Barwa	日雇い	本人	1	25	0	3,000	-	C	4	1	1.24	1
8	Barwa	日雇い	本人	1	28	10	3,000	-	C	4	1	0.00	0
9	Barwa	日雇い	本人	1	50	0	3,500	-	C	3	1	0.00	0
10	Barwa	日雇い	本人	1	39	0	3,000	-	C	3	1	0.00	0
11	Barwa	日雇い	本人	1	25	0	3,500	-	D	2	1	0.00	0
12	Brahmin	工場労働	長男	1	25	10	3,600	農業	A12	14	6	6.00	7
13	Chamar	石工	本人	1	40	0	7,200	-	C	7	1	1.24	3
14	Chamar	石工	本人	1	44	0	7,200	-	C	5	1	1.24	3
15	Gujar	日雇い	本人	1	35	0	2,400	-	B1	7	6	6.00	5
16	Gujar	石工	本人	1	25	1	4,000	-	C	4	1	3.10	1
17	Gujar	工場労働	長男	1	25	0	4,800	農業	B1	6	2	6.00	5
18	Koli	日雇い	本人	1	55	0	6,000	-	A12	11	3	1.24	2
19	Koli	日雇い	親子	2	-	-	6,000	-	B0	7	2	0.00	0
20	Koli	日雇い	親子	3	-	-	6,600	-	A12	7	3	1.24	0
21	Koli	日雇い	親子	2	-	-	6,000	-	C	7	1	0.00	0
22	Koli	日雇い	本人	1	35	6	2,000	-	C	5	1	0.00	0
23	Koli	石灰塗装	本人	1	40	5	7,500	-	C	6	1	0.00	0
24	Koli	石工	本人	1	50	0	10,000	-	B1	6	2	1.24	2
25	Koli	日雇い	本人	1	60	0	3,000	-	C	4	1	0.00	0
26	Koli	日雇い	本人	1	60	0	3,600	-	D	1	1	0.00	0
27	Mali	日雇い	息子	6	-	-	24,000	無職	A16	29	6	4.96	14
28	Mali	日雇い	孫	3	-	-	7,200	無職	A023	20	10	9.30	15
29	Mali	日雇い	兄弟	3	-	-	10,000	-	A03	18	3	3.72	0
30	Mali	日雇い	孫	3	-	-	10,000	無職	A03	17	5	6.20	8
31	Mali	日雇い	兄弟	3	-	-	13,000	-	A03	12	4	6.20	9
32	Mali	建築労働	長男	1	30	5	10,000	農業	B1	5	2	4.30	3
33	Brahmin	公務員	本人	1	53	8	19,000	-	A12	14	3	3.00	3
34	Brahmin	公務員	長男	1	30	10	12,000	無職	A12	11	2	4.00	3
35	Brahmin	鉄道員	本人	1	55	5	18,000	-	B1	10	2	2.00	2
36	Brahmin	公務員	長男	1	40	10	20,000	農業	B1	8	2	3.72	2
37	Brahmin	鉄道員	本人	1	50	5	18,000	-	B1	6	4	2.00	3
38	Brahmin	鉄道員	本人	1	45	9	13,000	-	C	5	1	1.00	4
39	Brahmin	公務員	本人	1	40	10	12,000	-	C	5	1	0.00	1
40	Gujar	公務員	長男	1	40	10	18,000	無職	B1	9	1	5.00	6
41	Gujar	公務員	本人	1	40	0	15,000	-	C	7	1	3.72	4
42	Gujar	公務員	長男	1	40	2	10,000	農業	A02	7	2	14.80	7
43	Mina	公務員	本人	1	35	0	12,000	-	C	7	3	1.86	2
計				62			372,100			102	114.07	129	

(資料：1987年現地調査による)



以上のような劣悪な道路事情ではあるが、本村から毎日バンディクイに出て働く人は62人を数える。その内訳は、表10aの通りである。47人は臨時的雇用者で、そのうちの38人は運搬・雑業労働等に就労している。特に目立つのは、マリの6世帯（いずれも3～9エーカーの農地を所有）、19人が町で臨時的な雇用就労していることで、いずれも兄弟のつながりを利用して職を得ている。世帯番号⑳の場合では、世帯員6名が雑業労働を本業とし、年間1人当たり3,000ルピーを得ている。いずれも家族人数の多い合同家族である。他では、コーリーの9世帯（6世帯は土地なし世帯）、13人が主に親子関係を軸にして雑業に従事しており、またバルバの7世帯（1世帯のみ農地所有、いずれも核家族形態）は、その多くが世帯主のみ就労している。このようにコリ及びバルバ世帯の多くは町で職を得ているが、彼らは町に最も近い村域北端のカッチ集落の住人であることを考えれば、これは至極当然と言える。カッチ集落の住人は、社会的にも経済的にもアパネリ村全体の中ではかなり異質な存在である。このようなカッチ集落を主集落の住人は、ハリジャン・バスティと呼んでいる。

一方、恒常的雇用としては、一般公務員8人と鉄道関連勤務3人がいることは前述したが、これをコミュニティ別に見ると、7人がブラーマンで、その多くが世帯主である。他は、グジャー3人とミナ1人であり、後者は指定ドライブに対する職業枠留保によって職を得たものである。

2) ジャイプール市

ラージャスターン州の州都ジャイプール市は、人口97.7万人（1981年）を有する州内最大の都市で、行政・教育文化の中心であると同時に、広大な後背地を擁し商業機能の集積も高い。宝石・大理石、織布等の加工・販売が多く観光都市としても有名である<sup>39)</sup>。

このジャイプール市で就労しているアパネリ村民は、表10bの通りである。鉄道関係が6人、警察官が4人である。すべてがブラーマン世帯の者であり、世帯番号㉑のように親子とか、㉒のように兄弟で就労している例が見られる。この他に21人の村民が、ジャイプール市で働いているが、その内訳は鉄道・警察以外の公務員が8人、不安定雇用就労4人、リクシャ（人力三輪車）運転・商店等の自営業が9人である。リクシャ就労者はク

表10b ジャイプール市就労者一覧

世帯番号	ジャーティ	職業	世帯主 続柄	人数	就 労 者			世帯主 職業	家族 形態	世帯 人数	就労 者数	耕地 面積	ウシ 頭数
					年齢	学歴	年収額						
1	Brahmin	商業	長男	1	30	10	18000	農業	A13	14	9	20	5
2	Brahmin	商業	息子	2	-	-	12000	衣服商	A02	12	2	4.34	3
3	Brahmin	商業	息子	2	-	-	20000	農業	A13	14	9	20	5
4	Brahmin	工場労働	長男	1	32	10	4880	農業	A13	15	6	4	10
5	Brahmin	工場労働	次男	1	25	11	5000	農業	B1	7	2	4	2
6	Brahmin	日雇い	本人	1	30	0	2000		D	3	0	0	2
7	kumhar	力車運転	息子	5	-	-	20000	農業	A17	28	12	2	5
8	kumhar	庭師	長男	1	25	0	1000	日雇い	B0	7	0	0	2
9	Brahmin	警察官	三男	1	30	10	12000	農業	A04	19	4	2	9
10	Brahmin	公務員	長男	1	41	不明	18000	司祭	A13	18	1	1.24	4
11	Brahmin	鉄道員	長男	1	26	8	6000	農業	A03	11	7	5	5
12	Brahmin	警察官	長男	1	29	8	10000	農業	A12	10	5	3	4
13	Brahmin	鉄道員	兄弟	2	-	-	21600		A02	10	4	3	2
14	Brahmin	鉄道員	親子	2	-	-	28000	鉄道員	B1	10	2	2	2
15	Brahmin	公務員	本人	1	42	10	8000		C	8	4	3.72	1
16	Brahmin	警察官	長男	1	28	9	10000	弁護士	B1	8	2	3	2
17	Brahmin	鉄道員	本人	1	25	10	12000		B0	7	0	1	2
18	Brahmin	鉄道員	弟	1	25	8	10000	農業	A02	6	1	4	2
19	Gujar	公務員	次男	1	25	10	13440	農業	A12	14	10	24.8	3
20	Kumhar	公務員	長男	1	28	2	10800	製陶業	A02	10	10	3.72	6
21	Mali	公務員	長男	1	26	11	9000	日雇い	B1	10	6	0	2
22	Mina	公務員	長男	1	30	10	9600	農業	A15	21	12	21.8	7
23	Rajput	公務員	次男	1	16	8	6000	農業	B1	9	0	4	3

(資料：1987年現地調査による)

マールの7人であるが、その中の5人は1世帯(28人の合同家族)の兄弟である。

以上から知れるように、ジャイプールで職を得ているのは昔から子弟に教育を科して村外就労を志向させてきたブラーマン(合計20人)や、家族の結束を固めて農業外の職業にも積極的な姿勢をみせているクマールの人々である。これらの多くが合同家族形態をとっていることも注目される。彼らは妻子を村に残し単身で働いているが、週末や勤務明けに鉄道を利用して帰宅するのを常態としている。

### 3) デリー市

表10cの通り、デリーで働く村民は、14人(12世帯)を数える。バンディクイ町から、デリー市までは鉄道・バスで5～6時間で着く。その中の10人が、不安定雇用の就労で、内訳は一般労働にバルバとコーリーから6人、建築労働にクマールの3人、運転手にバルバの1人である。親と子どもを村に残し、夫婦で日雇い労働に就いている例と同じく、日雇いの未亡人1人を除くと、他はすべて男性である。また、他の都市の場合と同様に、核家族の世帯主が多い。なお、デリー市で就労する14人(12世帯)の中で農地を全く所有していない世帯は7世帯となっているが、この割合はバンディクイ町の場合(44世帯中14世帯)やジャイプールの場合(23世帯中3世帯)に比べて著しく高い。これは、3市町における未熟練労働者(農村貧困者層)に対する雇用機会の広狭やこれに対するアバネリ村民の接近度の違いを示唆していると思われる。例えば、ジャイプールの市について見ると、その背後にラージャスターン州西部の

大量の貧民労働者を抱えているため、就業機会は少なく、かつ労賃は低い。したがって、アバネリ村民はジャイプールの市で職を求めるよりは、時間距離があっても比較的職の得やすいデリー市を志向する傾向がある。

## 5. 家畜経済の展開

### 1 家畜構成とウシ飼育タイプ

本村が所在するパスワ郡下における1961年以降の家畜飼育の動向は、①1970年代後半に、水牛頭数がゼブ頭数を上回り、水牛卓越地域となったこと、②搾乳中ウシ頭数の増加、特に水牛頭数が顕著な増加を見せたこと、③山羊や豚等の肉用家畜頭数が増加したこと、④使役・運搬用家畜のゼブ牡牛や馬・ロバ頭数は減少したが、粗食で速度の速いラクダ頭数は増加<sup>40)</sup>したこと、等が特徴として指摘できる(表11)。

はじめに、本村における家畜構成とウシ飼育タイプについて以下に検討することにする。総世帯数210戸のうち、ウシ飼育の世帯は、74.6%であり、さらに山羊・羊等の中小家畜・家禽類を含めると飼育世帯率は83.2%となる。この高い家畜飼育率は、雑穀を中心とした天水依存の耕種生産が、常に低い生産性と収穫の不安定性に悩まされている状況を補う意味をもつものと思われる。

1961年の家畜センサス調査によれば、表12の通り、耕起・運搬用のゼブ牡牛が最も多く、ついでゼブ牝牛となり、搾乳用牝水牛は60頭を下回っていた。しかしながら1977年センサスでは、1961年に比べて牝水牛頭数の著増とゼブ牡牛頭数の漸減が認められる。これには、1970年から始まるオペ

表10c デリー就労者一覧

世帯番号	ジャーティ	職業	世帯主続柄	人数	就 労 者			世帯主職業	家族形態	世帯人数	就労者数	耕地面積	ウシ頭数
					年齢	学歴	年収額						
1	Barwa	仕立業	本人	1	22	10	6000		C	2	0	0	1
2	Barwa	運転手	本人	1	50	0	7200		A02	8	1	1	5
3	Barwa	日雇い	夫婦	2	-	-	5000		A02	10	3	4.34	2
4	Brahmin	日雇い	次男	1	18	不明	2400	ミルク販	B1	10	3	0	3
5	Koli	日雇い	本人	1	54	0	4500		C	4	0	0	1
6	Koli	日雇い	本人	1	45	0	3600		C	3	0	0	1
7	Kumhar	建築労働	兄弟	2	-	-	12000	農業	A17	28	12	2	5
8	Kumhar	日雇い	本人	1	40	0	8000		C	7	2	0	1
9	Kumhar	建築労働	本人	1	45	0	6000		C	3	3	0	1
10	Brahmin	鉄道員	三男	1	36	9	12000	鉄道員	A04	18	0	0	4
11	Gujar	公務員	長男	1	30	0	14000	無職	A04	18	5	9.3	4
12	Gujar	公務員	本人	1	30	0	13000		A02	9	4	3	6

(資料：1987年現地調査による)

表11 バスワ郡家畜飼育頭数の推移

		1961	1972	1977	1983	
大 家 畜	牛	牡	22464	22696	21544	19590
		牝	21865	21551	19159	20334
		(搾乳中)	(5170)	(5779)	(4995)	(6013)
	計	44329	44300	40703	39981	
	水 牛	牡	3549	4258	3760	5143
牝		24030	18827	37082	43125	
(搾乳中)		(7375)	(8619)	(9784)	(13779)	
計		27579	32771	4842	48268	
ウシ頭数合計		71908	77071	81545	88249	
ラクダ		492	658	982	1075	
中 家 畜	羊	9455	9083	7620	10231	
	山羊	43808	44448	51004	62091	
	豚	813	1315	1257	1317	
	馬・ロバ	155	88	91	65	

(資料：家畜センサス)

表12 アバネリ村家畜飼育頭数の変化

家畜の種類	1961	1977 指数	1987 指数
1 Cows	65	165 (253.8)	142 (218.5)
2 OX (Bullocks)	194	169 (87.1)	153 (78.9)
3 She-Bufferaloes	59	320 (542.4)	456 (772.9)
4 He-Bufferaloes	23	33 (143.5)	44 (191.3)
ウシ総頭数	341	687 (201.5)	795 (233.1)
5 Sheep	155	83 (53.5)	140 (90.3)
6 Goats	85	387 (455.3)	358 (421.2)
7 Camels	6	0 (0.0)	5 (83.3)
8 Donkeys		70	24
9 Pigs		17	18
合計	587	1244 (211.9)	1340 (228.3)

(資料：1961年、1977年は家畜センサス、1987年は現地調査)

(注) ( ) 内は1961年を100とした指数

レーション・フラッド (Operation Flood) 計画の展開が関係しているものと思われる。この傾向は1980年代になると一層強まり、搾乳用牝水牛頭数が著しく増加した。また、一方ではゼブ牡牛と牝牛の漸減が明瞭となった。従来から“ゼブ牛は宗教的、水牛は経済的”と言われてきたが、1970年代から1980年代における変化はこれを裏書するような展開であった。

ウシ飼育の類型化には、ゼブ牛と水牛と各々牝牝別に組合せることによって15のタイプが考えられるが、本村では表13の通り11タイプが検出された。その中で、本村のウシ飼育の基本タイプは、牝水牛単一飼育 (タイプ11, 36世帯) であり、これにゼブ牡・牝牛・牝水牛飼育 (タイプ2, 28世帯) とゼブ牡牛・牝水牛飼育 (タイプ6, 28世帯) の2つのタイプが加わって三本柱となっている。その他には、タイプ7 (15世帯) やタイプ3 (12世帯) が多い。以上の5つのタイプを併せると、その飼育世帯数はウシ飼育世帯総数の76.3%を占め、またウシ飼育頭数は全体の72.5%となる。しかも、これら5つのタイプには、いずれも牝水牛飼育が含まれている。牝水牛を中軸とするこのようなウシ飼育の実態が、インド最大の牝水牛集積地に位置する村の特徴である。次に、該当世帯数の多い3つの飼育タイプについて以下説明する。

### 1) ウシ飼育タイプ11

牝水牛のみを飼育するタイプ11の世帯は36世帯を数える。1世帯の飼育頭数は多くて7頭、平均では2.5頭 (うち搾乳中は、0.6頭) である。また

表13 ウシ飼育タイプ別世帯数

飼育タイプ	世帯数	合同家族数	主なジャーティ (世帯数)
1 OX.COW.HE.SHE	11	7	Gujar (4), Brahmin (3)
2 OX.COW.SHE	28	15	Gujar (14)
3 OX.HE.SHE	12	4	Gujar (7)
4 COW.HE.SHE	4	3	Brahmin (4)
5 OX.COW	4	1	Brahmin (2)
6 OX.SHE	28	5	Gujar (15)
7 COW.SHE	15	5	Brahmin (6)
8 HE.SHE	6	2	Kumhar (3)
9 OX	4	1	Barwa (2)
10 COW	8	0	Brahmin (3)
11 SHE	36	5	Brahmin (13), Gujar (5)
合計	156	48	

(資料：1987年現地調査による)

このタイプの世帯の平均耕地面積は2.6エーカー（うち灌漑耕地面積1.6エーカー、非灌漑耕地面積1.0エーカー）で、村平均の4.3エーカーを下回る。36世帯のうち、9世帯は耕地を所有していない。また36世帯の6割は核家族で、合同家族は5世帯に過ぎない。そのために、1世帯当りの人数は6.6人で、村平均の7.5人より少ない。世帯主が農業を本業とする世帯（農家と言える世帯）は17世帯であり、タイプ11の全世帯の半数を割る。さらに、長男が農業をしている。世帯は8世帯のみである。居住分布は、26世帯が主集落に、6世帯がカッチに、残りは中・南部に散在する。

以上から知れるように、タイプ11の世帯は耕種と家畜飼育からの収入では家計を賄うことができず、多くは農業外収入を得ている。すなわち、36世帯のうちの15世帯は、家族の誰かがバンディクイ町をはじめ遠くカルカッタ市やアーメダバード市において職を得ている。換言すれば、これらの世帯の主たる収入源は村外にあり、牝水牛の飼育は自家消費のミルク生産の性格が強い。

## 2) ウシ飼育のタイプ2

このタイプは28世帯あり、これら1世帯での平均ウシ飼育頭数は、8.4頭（牝牛2.1頭、牝牛2.2頭、牡水牛4.1頭）で、タイプ1の場合の10頭について多い。所有耕地面積は1世帯平均7.9エーカー（灌漑耕地6.6エーカー、非灌漑耕地1.3エーカー）であり、村平均の4.3エーカーを大きく上回っている。しかし、耕地を全く所有していない2世帯もある。それらは、いずれもブラーマン世帯で、世帯主が日雇いとなっているが、それぞれの長男が公務員・教員として収入を得ている点で共通している。世帯規模を見ると、平均11.1人であり、飼育頭数の場合と同様にタイプ1の12.6人について大きい。合同家族の形態をとっている世帯が過半を占めている（15世帯、53.6%）。合同家族形態の15世帯のうちで、農業を本業とするのは9世帯である。残りの世帯主は公務員、鉄道員、教員等の農業外業種に就いているが、これに替わって親や弟たちが農業経営に当たっているケースが多い。農業経営上での合同家族の積極的な存立理由は、①均分相続による不利益の排除、②豊富な自家労働力の確保等、であり、消極的理由として、③職がないために親・兄弟の世話になる、④親族関係を大事にする、といったことがあげられる。タイプ2において合同家族が多いことは、所有（経営）耕地面積の規模及びウシ飼育の種類・頭数の多さと相通じている。なお、タイプ2

は、中家畜の飼育も多いこと（1世帯当り7.0頭）をあげ得る。タイプ2の世帯はグジャーが14世帯と多く、村域の南部に住む。

注目すべきことは、タイプ2の世帯平均の年間収入が1.5万ルピーと推計され、村内で最も家計的に恵まれていることである。彼らの主たる主収入源は、グジャーとサニでは耕種農業に、ブラーマンでは公務・教員・鉄道等の農業外に、チャーマルでは職人（石工）にあるが、そうした比較的有利で安定的な収入を原資として、牝水牛の飼育頭数を増し、農業経営の一層の拡大を図っていると言える。

## 3) ウシ飼育タイプ6

このタイプは、ゼブ牝牛と牡水牛との飼育型で、28世帯ある。1世帯平均の飼育頭数5頭（ゼブ牝牛1.4頭、牡水牛3.6頭）で、所有耕地面積は5.3エーカー（灌漑耕地3.9エーカー、非灌漑耕地1.4エーカー）である。28世帯のうち農業を本業としているのは、23世帯（82%）と多く、後継者の長男の半数はすでに農業に就いている。さらに、耕地を所有していない世帯は僅か1世帯である。大部分が核家族または折衷家族の形態をとっており、合同家族は僅か5世帯である。したがって、世帯規模は7.0人と、村平均を下回る。当然ながら世帯平均の年間収入は村平均（9,000ルピー）より低い7,500ルピーにすぎないが、合同家族に一般的に見られる保守的農業経営から脱して独自の方向を探っている積極的な本業農家が多い。このタイプ6にはグジャーが15世帯（45%）と多く、うち13世帯は本業農家である。南部および主集落に多く住んでいる。

以上のように、このタイプ6の世帯は村平均より低い規模の農業及び家畜飼育を営んでいるが、搾乳用牝水牛を増やすなど旧弊にとらわれない農業経営を試みており、したがって彼らの動向こそ本地域の今後を考える上で重要と考える。

## 2 ジャーティ別の家畜飼育

伝統的村落においては、ジャーティによって独特な家畜飼育が見られるが、この傾向は本村においても少なからず見られる。

ジャーティ別家畜飼育について1961年と1987年と比較すると、次の諸点が明らかとなる（表14）。それらは、①グジャーによる家畜飼育頭数が大幅に増加したこと、②ブラーマンによる耕牛（ゼブ牝牛）飼育が半減したこと、③ロバを中心に僅かの水牛・耕牛しか飼育していなかったク

表14 ジャーティ別家畜飼育頭数の変化

ジャーティ名	年次	ウシ						その他の家畜			家畜 総頭数 Total
		計	割合	ゼ ブ 牡	牛 牝	水牛	割合	ラクダ Camel	羊 Sheep	ヤギ Goat	
Brahmin	a	117	34.3	25	70	22	26.8	3	46	0	166
	b	209	26.2	53	30	126	25.1	0	0	12	221
Gujar	a	93	27.3	20	55	18	22.0	2	39	44	178
	b	358	44.9	46	75	237	47.2	3	137	248	746
Mali	a	33	9.7	1	30	2	2.4	0	22	12	67
	b	92	11.5	21	22	49	9.8	0	0	37	129
Rajput	a	26	7.6	10	6	10	12.2	0	10	3	39
	b	10	1.3	1	2	7	1.4	0	0	2	12
Mahajan	a	17	5.0	6	4	7	8.5	1	0	0	18
	b	0	0.0	0	0	0	0.0	0	0	0	0
Khati	a	10	2.9	0	6	4	4.9	0	12	0	22
	b	11	1.4	5	2	4	0.8	0	1	0	12
Mina	a	10	2.9	0	10	0	0.0	0	0	2	12
	b	14	1.8	2	3	9	1.8	0	0	10	24
Kumhar	a	9	2.6	0	5	4	4.9	0	0	0	9
	b	63	7.9	12	10	41	8.2	2	0	27	92
Koli	a	8	2.3	0	0	8	9.8	0	6	0	14
	b	4	0.5	0	0	4	0.8	0	0	10	14
Jain	a	8	2.3	3	2	3	3.7	0	0	4	12
	b	0	0.0	0	0	0	0.0	0	2	0	2
Nai	a	6	1.8	0	2	4	4.9	0	12	8	26
	b	0	0.0	0	0	0	0.0	0	0	0	0
Chamar	a	4	1.2	0	4	0	0.0	0	4	8	16
	b	6	0.8	1	2	3	0.6	0	0	5	11
Bhangi	a	0	0.0	0	0	0	0.0	0	4	4	8
	b	0	0.0	0	0	0	0.0	0	0	1	1
Barwa	a	0	0.0	0	0	0	0.0	0	0	0	0
	b	23	2.9	0	7	16	3.2	0	0	6	29
Bohara	a	0	0.0	0	0	0	0.0	0	0	0	0
	b	4	0.5	0	0	4	0.8	0	0	0	4
その他	a	0	0.0	0	0	0	0.0	0	0	0	0
	b	3	0.4	1	0	2	0.4	0	0	0	3
合計	a	341	100.0	65	194	82	100.0	6	155	85	587
	b	797	100.0	142	153	502	100.0	5	140	358	1300

(資料：1987年現地調査による)

(注) 但し a は1961年, b は1987年を表す。

マールが、今日では牝水牛を中心に牝牛・山羊・ラクダなどを増やしていること、④少数ジャーティの家畜飼育は、全体として相対的に低下していること、などである。

本村の家畜飼育におけるグジャーの役割は、特に大きい。グジャー54世帯のうちウシを飼育している世帯は92.5%の高率を示し、グジャーによって飼育されているウシは村のウシ総頭数の44.9%を占めている。その中味を見ると、耕起や運搬に使役されるゼブ牝牛の50%、値上がり急で高価格の搾乳用水牛の47.2%をグジャーが飼育している。グジャーのウシ飼育は経済性重視と言われる、前述の飼育タイプで表現すればタイプ6、タイプ2及びその亜型であるタイプ3である。羊・山羊に至っては79.7%を占めている。ウシ飼育規模別

世帯順位での羊・山羊・飼育頭数の分布を見ると、①ウシ飼育が10頭以上の世帯で、羊・山羊等の中家畜飼育も多くなる傾向があること、②ウシ飼育が5、6頭世帯でも中家畜飼育が比較的盛んであること、③ウシ飼育をしない、あるいは零細な世帯の中で20～40頭の中家畜を飼育している世帯が少数ながら見られること、などが指摘できる。

ブラーマン世帯の総数66戸の80.3%がウシを飼育しているが、その頭数は村全体の25.4%を占めるにすぎない。しかし、注目されることは、飼育ウシ頭数の26.4%に当たる53頭が牝牛という点である。これをグジャーの場合に比較すると、12.8% (46頭) であり、牝牛飼育がブラーマンにおいて比較的多く見られることを示している。これをウシ飼育タイプで示すとタイプ4、7、10に

該当する。このことは、依然として牝牛を“聖なる牛”とする観念がブラーマン世帯に残存しているのではと推察させる。しかし、中家畜飼育においては、羊・山羊が僅かに7戸で12頭飼われているだけで、豚やロバは飼育されていない。

本村におけるクマール世帯数は18であるが、そのうち16世帯が何らかのウシを飼育している。1世帯平均のウシ飼育頭数は3.9頭であり、グジャーのそれの約2分の1にすぎない。ウシ以外では羊・山羊の飼育は少ないが、村全体(27頭)の77.8%に当たるロバを21頭を飼っている。これは、壺・茶器等の材料や製品の運搬に使役するためである。なお、豚やラクダの飼育も見られるが、その数は少ない。

その他のジャーティにおいては、特記すべき家畜飼育はない。4頭の水牛がコーリーによって飼育されている他、指定カーストによる豚や鶏の飼育が目につく程度である。

### 3 水牛繁殖と畜産物販売

本村の家畜飼育がウシとりわけ水牛と山羊に特化していること、しかもそれらは、ミルク生産のための牝飼育であることが明らかとなった。その意味で、水牛と山羊の繁殖は重要な問題である。

#### 1) 水牛の繁殖

牝水牛を飼育している村人に繁殖方法について尋ねると、「発情した時は、近頃は種牛飼育農家に連れて行く」と答え、「酪農協同組合による人工授精は、やりたくない」と言う。時には、依然として迷い牝水牛(繁殖能力のある)にまかせているケースも見受けられる。すなわち、水牛の種付けには、①特定の種牝水牛による受精、②酪農協同組合による人工授精、③村落をさまよう迷い牝水牛による3つ方法があるが、本村において最も普通なのは種牝水牛飼育農家での種付け方法である。

種牝水牛飼育農家での種付けは、次のようにして行われている。牝水牛が発情(年1回だけ)すると種牝水牛を飼育している農家へ直接連れていく。種付け農家は、村内のカッチ地区に1ヶ所、隣村のジャサバラとピチュバラに各1ヶ所、計3ヶ所ある。普通の場合、1日に5回から6回の交尾を行わせ、平均10ルピー余りの料金を支払うことになっている。村人はこれを高いと言う。種牝水牛は、この地方の在来種(Desi Breed)であり、搾乳量の多いムラー種が導入されていないのは、利用農家が優れた種牝水牛による品種改良に余

り関心を示さないためである。しかし近年は、単に種付けの成功に関心を示すだけでなく、優れた種牝水牛との交尾によって品種の改良に期待する農家も少数ながら出てきているという。その際の交尾料は15ルピーである。

次に人工授精について見ることにする。酪農協同組合が行う人工受精は、本来はゼブ牛を対象として始められたものである。つまり、外国種牛の精子により搾乳量の増加を図るものであった。したがって、水牛飼育が卓越する本地域の農民にとって、ゼブ牝水牛対象の人工授精を進める酪農協同組合の方針は、もともと関心を持てるものではなかったのである。しかも組合の授精実績を見るに、1983年4月から1986年3月までの50例(ゼルシー種37例、ホルスタイン種12例、そして例外として水牛ムラー種1例)のうち、受胎に成功した例は5例(内1例は死産)にすぎなかった。つまり、人工授精による受胎率は僅か10%であった。受胎率が低い原因としては、①発情中の牝牛を受胎可能性の高い24時間以内に農民が連れて来ない(繁殖に対する農民の知識と行動)、②精子が古かったり、強い太陽光線で損なわれている(精子の管理の悪さ)、③人工授精師の技術が未熟である、等があげられている。受胎率の低さが、農民の信用を失い、結果として人工授精を中止せざるを得ない状態に追い込まれ、現在は休業している。同様の失敗はアバネリ村だけでなく、バンディクイ町その他でも見られる。そのため、ゼブ牝水牛の繁殖は、依然として迷い種牛(Stray Ox)に多くを依存しているのが実状である。

#### 2) 濃厚飼料の購入

近年、かなりの搾乳農家が酪農協同組合から濃厚飼料を購入し、搾乳中のウシに与えるようになってきたが、その代金をミルク生産の収益から支払うまでに成長している農家は少ない。ドウサ酪農協同組合で1袋(20kg)の牛配合飼料を40ルピーで入手(手数料5%)できるようになったが、その購入量は村全体としてもあまり多くはない。また、多くのウシ飼育農家は、粗飼料のトーラ(Toora, 麦藁)すら4ヶ月間は自給できず、近隣農村から牛車やトラクターなどで40kg単位で(平年で25ルピー)で購入しなければならず、その負担も大きい。調査した1987年には2年続きの大干ばつに見舞われており、粗飼料の価格は、平年の2倍を越したが、酪農協同組合からの粗飼料への援助は全くなかったと言われる。したがって、搾乳農家にとって飼料購入は相当の高負担で

あるが、それに対する酪農協同組合からの援助は殆ど期待出来ない状態である。

### 3) 生畜販売とミルク販売

生畜及び畜産物の販売は、多様な家畜構成と比較的多い飼育頭数にもかかわらず、一般的に低調である。生畜販売では、①肉用として販売される成長した中家畜の山羊・羊、②主に肉用として販売される1、2歳の牡水牛、が主であり、その他③老廃ウシや豚、卵等の販売、も一部見られる。

また畜産物では、④伝統的なギー (Ghee, 純度の高いバター) の販売のほか、近年では、⑤ミルク販売、が急増している。

一方、本村でサンプル調査した30世帯での1980年以降の購入家畜についての調査では、図7の通りで乳用牝水牛の購入が圧倒的に多く、ついでバロックで、牝牛の購入例は僅か3例にすぎない。特に、専門的な酪農を指向している農家において、純粋もしくは4分の3ムラー種等の搾乳量の多い牝水牛の購入例が増加していることは、注目される。

### 4 サンプル農家の家畜飼育実態

家畜飼育の実態及びそれが農家経済にどのような位置を占めているかを明らかにするため、村内209世帯のうちから30世帯をサンプル調査した。サンプル世帯の選定には、ウシ飼育規模、飼育家畜の構成、村内における住居の位置の3点を考慮

した。考察に先立って、耕種農業部門 (耕種生産) と家畜飼育部門 (畜産) との関連を明確にしておく必要がある。基本的には家畜飼育は耕種農業に従属しているとする視点から、それが耕種農業からどの程度独立の部門として成立しているかが重要と考える。なお、この問題に関しては、耕種部門と畜産部門との関係から畜産形態を議論した菱沼の見解を参考にした<sup>41)</sup>。

そこでまず、本村における耕地面積と家畜頭数との関係を見よう。放牧その他の方法で家畜を飼っている半乾燥地域においては、個々の世帯の家畜規模はその所有耕地面積に必ずしも比例しない。そこで、サンプル30世帯それぞれの飼育家畜頭数を家畜単位に換算し (表15)、それを耕地面積に関係づけて見た。その結果、図8の通り耕地面積と家畜単位数との関係から、30世帯は3つのグループに分類できることがわかった。つまり、A型 (7世帯)、B型 (18世帯)、C型 (5世帯) である。なお、A型とB型はさらに2つの小グループからなる (表16)。

#### 1) 耕種農業と家畜飼育の規模が共に大きい世帯 (A型)

A型7世帯の平均耕地面積は14.7エーカーで、B型のそれの約2.7倍 (5.4エーカー) である。家畜単位数は平均で17.8単位 (最大24.6単位から最小11.6単位まで) で、B型のそれの約1.8倍 (9.8単位) である。さらに、平均耕地面積14.7エー

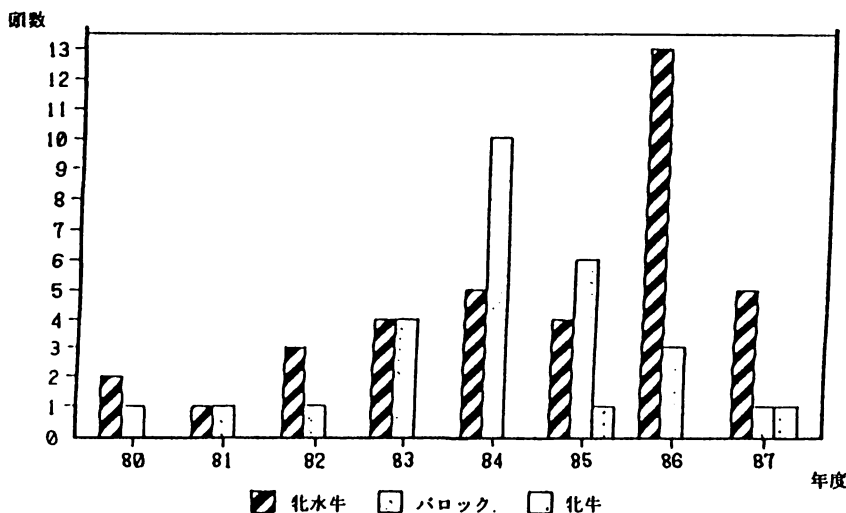


図7 サンプル農家のウシ購入牛頭数

(資料：1987年現地調査による)

表15 家畜単位換算表

Cow Units (家畜単位) Jaipur District..Abhaneri Village (1990. 8)

1)	ラクダ (成)	2.0
2)	ゼブ牝牛	In Working
	成牛	2.0
	子牛 (0-2)	1.7
3)	ゼブ牝牛	In Milking
	成牛	1.2
	子牛 (0-2)	0.4
4)	牝水牛	育成 (2-3)
	成牛	0.8
	子牛 (0-1)	0.3
5)	牝水牛	In Milking
	成牛	1.9
	成牛	1.6
	子牛 (0-1)	0.8
6)	山羊	成牡
	成牝	0.18
	子	0.15
7)	羊	成牡
	成牝	0.17
	子	0.10
8)	ロバ	成
	子	0.30
		0.10

(資料: Whyte,R.O. (1964). 中里 (1988) を参考にして作成)

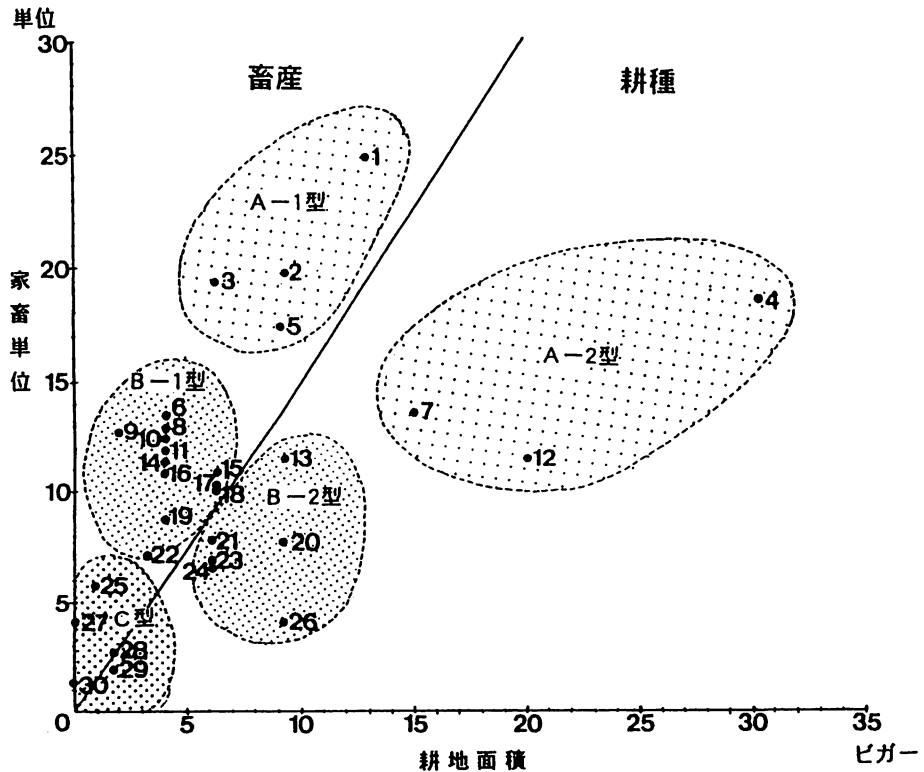


図8 サンプル農家の分類





カーの内訳は、灌漑耕地が8.7エーカーでB型の2.1倍（B型は4.0エーカー）、非灌漑耕地が6.1エーカー（B型は1.4エーカー）である。約言すれば、A型世帯は耕地面積において他より極端に大きく、非灌漑耕地の割合が著しく高い点に特色がある。

次に家畜飼育を見ると、ウシ飼育は平均12.1頭（ゼブ牛4.8頭、水牛7.2頭）であり、これはB型の平均7.2頭（ゼブ牛2.6頭、水牛4.5頭）の1.7倍に当たる。ウシ以外の家畜としては羊と山羊が多く、羊は3世帯で85頭、山羊は5世帯で58頭の飼育が見られる。このように中家畜が多く飼育されているのも、A型の特徴の一つである。

なお家族形態を見ると、7世帯のうち6世帯が合同家族であり、世帯人数は平均14.7人（B型の1.5倍）、既婚兄弟の同居者数も平均3.43人（B型2.47倍）となっている。

#### (1) A型世帯の中で家畜飼育に傾斜している世帯（A-1型）

A-1型世帯は4戸であり、そのウシ飼育平均頭数は14.0頭である。内訳はゼブ牝牛3.0頭、ゼブ牝牛2.7頭（うち搾乳中0.7頭）そして牝水牛頭数は8.0頭（うち搾乳中2.7頭）である。ミルク生産を1986～87年実績で見ると、1世帯平均で1ヶ月282kg、金額にして約1,268ルピー（1kg当り4.5ルピー）の計算になる。つまり、1頭当り1日2.7kgの生産である。1987年10月の調査時にはどの世帯も生乳販売はなく、僅かに2世帯で乳製品のギーの販売例があった。ただし、1986～87年は大干ばつの最中であり、したがって上記の数値は参考程度の意味しかないであろう。

これら4世帯において過去5ヶ年間（1982.7～1987.7）に自家生産されたウシは、1世帯平均8.0頭であるが、他からの購入や斃死・販売等があったので、実質は平均5.25頭の増加となった。つまり、1世帯平均で年間で約1.05頭の増加を見たことになる。

ウシ頭数の増加は自家生産に依存するところが大きい。飼育ウシの年齢・品種構成の上から他からも購入する必要もあり、そのための支出は農家経済上無視できない金額である。その上でウシの販売と購入に関する収支計算をすると、支出は1世帯平均で、年間約1,020ルピーとなる。1頭が970ルピーという計算になるが、3世帯はそれを自己資金で賄っているが、残る1世帯は村内の金貸しから借りたと言われている。次に、A-1型世帯の飼料基盤について見ると、基本的には粗

飼料は自給、濃厚飼料は購入というパターンである。つまり、世帯平均で9.45エーカーの耕地（灌漑耕地、6.4エーカー、非灌漑耕地3.1エーカー）を所有しているので、カーフ作のバジラ、ラビー作の小麦等からの十分な量の粗飼料が得られるからである。ただし、前述したように、調査時点は100年来の大干ばつという特殊事情から4世帯のうち2世帯が粗飼料を購入していた。

一方、主たる収入源とも言えるミルクの生産・販売について見ると、年間のミルク生産量をすべて販売したとしてその粗収益を推計し、金利や家族労働報酬をひとまず計算に入れずに求めた収支は、世帯番号②を除く3世帯の場合、月間300から1,000ルピーのプラスとなる。しかし、1986～87年実績では、ミルク販売が僅か1割程度（11.4%）であったため、月間現金収支の中での粗・濃厚飼料の購入費が86.4%と高いウェイトを占め、結局、1世帯平均で653ルピーのマイナスとなっている。最も良い収支を示す世帯番号④でさえ、月間56ルピーのマイナスとなっている。大干ばつの影響はミルク生産の激減だけでなく、粗飼料購入費の増額となって、ミルク生産世帯に大きな打撃を与えたことになる。

以上のように、1986～87年実績でA-1型4世帯の家畜経済を見ると、ギー販売やウシ繁殖による収入はあったものの、ミルク生産の激減によって生乳販売は皆無であり、一方で耕牛（牝牛）や牝水牛の更新のための経常支出のために、その収支は年間1,021ルピーの赤字となった。しかしながら、これら4世帯はいずれも中家畜の羊・山羊を飼育しており、それらからの収入は年間1,074ルピーとなり、現金の出し入れで見れば、結局は大家畜（ウシ）の赤字分を中家畜がカバーする形となっている。このように、生産されたミルクの9割近くが自家消費に役立ったこと、更新され飼育されているウシは再生産可能な資産として残されたので、A-1型世帯にとっては、大家畜のマイナスはさして問題にはならないと思われる。

#### (2) A型世帯の中で耕種農業に傾斜している世帯（A-2型）

A-2型世帯は3戸あり、そのウシ飼育平均頭数は9.7頭である。内訳はゼブ牝牛2.3頭、ゼブ牝牛1.3頭（うち搾乳中が0.3頭）、牝水牛4.6頭（うち搾乳中が2.0頭）である。1986～87年実績の1世帯平均搾乳量は1ヶ月130kg（約585ルピー）で、搾乳ウシ1頭当り搾乳量は1日当り1.9kgである。搾乳率は43.5%と高いが、3世帯はいず

れも生乳とギーを販売していない。

過去5ヶ年間の1世帯平均の飼育頭数を見ると、年間で1.2頭の増加を示している。注目されるのは、自家生産頭数より購入頭数が上回ることである。世帯番号④では、5年間に6頭を購入しているが、そのうち5頭までが搾乳用の牝水牛であり、1頭平均2,950ルピーであった。1986年7月に購入した3頭の場合、その購入資金の一部として、飼育していた山羊12頭の販売代金5,000ルピーを当て、不足分を村内の高利貸しからの借金(月2%の利子)で賄っている。この世帯は、総員21人の合同家族で、村内最大の耕地(30.3エーカー)を経営する。長男はジャイプールで政府関係のサービス業務に就き、妻子は世帯主夫婦や既婚の兄弟4人の家族とともに村に住む。四男は荷車の製作・修理を職とするほか農業に就いている。この世帯の農業経営の基盤は合同家族による耕種農業に置かれていたが、経営耕地の広さと家族労働の多さを活用して搾乳用牝水牛を増やしており、この世帯の今後の動向は耕種生産と家畜飼育との関係を見る上で注目される。なお、世帯番号⑫は村の酪農協同組合に加入してはいるが、特に搾乳収入を高める傾向にはない。ちなみに、この世帯はブラーマンである。

次に、飼料基盤について見よう。これら3世帯はいずれも広い耕地を所有し、3世帯平均で21.7エーカー(灌漑耕地11.6エーカー、非灌漑耕地10.1エーカー)であり、これはA-1型世帯の2.3倍の規模である。つまり、耕種生産中心の農家経営であり、その中から粗飼料はもちろん濃厚飼料の大半も自給するので、飼料購入費は1世帯平均で年間667ルピーにしかならない。これはA-1型の飼料購入費の僅か8%である。搾乳用牝水牛の占める割合が少なく、しかも搾乳されたミルクはすべて自家消費され販売に回らないことから、家畜飼育に伴う現金の出し入れは月間181ルピーのマイナスである。

以上のようにA-2型3世帯の家畜経済を見ると、現金収入の面では、水牛の牝子牛の残し親牛を販売した1例と搾乳用牝水牛を購入するために、山羊を販売した1例があるだけで、家畜及び乳製品の販売からの収入はない。一方、出費では、3世帯すべてが耕牛、搾乳用牝水牛を購入しており、また少量ながら濃厚飼料も購入している。したがって、A-2型世帯の家畜飼育の現状は、耕起・運搬利用、厩肥生産などいわば耕種生産に従属する形のものであり、畜産の面では資産保有的な意義はあるにせよいまだ本格的な展開に

入っていないと言える。

## 2) 耕種生産と家畜飼育の規模が小さな世帯(B型)

B型には18の世帯が含まれる。その平均耕地面積は5.4エーカーであり、村平均より1エーカー余り上回るものの、A型に比べると著しく少ない。ただし、灌漑耕地率が75%と高い。家族形態は、核家族7世帯、中間家族6世帯、合同家族、と3つが混在する。世帯平均の家畜単位は9.8単位であり、そのうちウシ頭数に限ってみると5頭から12頭を飼育する世帯が最も多く、1世帯平均では5.7頭となっている。

B型世帯のウシ飼育は、A型に劣らないほどの高い意欲が窺われる。前掲表2-16で知られるように、ミルク販売をしているのは世帯番号⑧と⑰に限られるが、B型世帯は主に乳製品のギーの販売例が見られる。したがって、B型の家畜飼育には耕種生産を補うミルク生産の性格が認められる。この型はB-1型とB-2型に分けられる。

### (1) B型世帯の中で家畜飼育に傾斜している世帯(B-1型)

B-1型は12あり、ウシ飼育の平均頭数は8.0頭である。その内訳は、ゼブ耕牛1.8頭、搾乳用牝水牛4.7頭(うち搾乳中は1.3頭)である。過去1年間(1986年7月~1987年6月)のミルク生産を1世帯平均で見ると、搾乳期間8ヶ月として月間220kg(990ルピー)であり、搾乳ウシ1頭当たり1日4.3kgとなる。この1頭当りの搾乳量はA型を上回る数値であり、B-1型の特徴と言える。しかし、搾乳ウシ率は32.1%と低い。

同じ期間にギーを販売した世帯は8世帯あったが、生乳を販売したのは8世帯の中の⑧と⑰のみである。これは、干ばつという異常事態のため、平年では事情はかなり追っていると思われる。世帯番号⑧と⑰のミルク販売先はバンディクイの茶店であり、それぞれ月に210kg、60kgを売っている。

過去5年間における1世帯平均のウシ頭数の変化を見ると、自家生産4.8頭と購入3.0頭に対して、斃死1.7頭、販売0.8頭であり、差し引き年間1.1頭の増加となる。この増加は、主に搾乳用牝水牛の購入によるものである。例えば、世帯番号⑧、⑨、⑳が過去5年間に購入したウシはすべて搾乳用牝水牛である。その他の5世帯においてもウシ購入費の過半を搾乳用牝水牛の購入に当てている。このような搾乳用牝水牛の購入は、村内の高

利貸しからの借金によってなされることが多く、12世帯の半ばを占めている。

B-1型世帯の飼料基盤は、耕地面積の零細性故に一般に貧弱である。前掲表16に示すように、粗飼料は購入してないが、濃厚飼料は年間1,640ルピーも購入している。これは搾乳中ウシ1頭当り964ルピーの金額であり、A型世帯のそれを上回る。B-1型のウシ飼育は零細規模の耕種生産を補う形で搾乳用ウシを取入れ、特に生乳・乳製品の販売に力を入れていると言える。過去5年間の搾乳用ウシの購入はそれを証明するものである。

## (2) B型世帯の中で耕種生産に傾斜している世帯 (B-2型)

B-2型世帯は6世帯で、1世帯平均5.7頭のウシを飼っている。その内訳は牝水牛2.6頭(搾乳中0.8頭)及びゼブ耕牛と牝牛がいずれも1.3頭である。ただし、1世帯のみ牝水牛を飼っていない。搾乳中ウシ率の低さ(23.1%)のために、1世帯平均のミルク生産は月間僅か349ルピー(搾乳期間8ヶ月, 77.6kg)にすぎないが、搾乳中ウシ1頭当りの1日搾乳量は3.23kgである。これはB-1型よりは低いが、A型に比べると多い。

搾乳したミルクを過去1年間に販売した世帯は、世帯番号は⑬と⑭だけである。しかも、いずれもギーとして販売したもので、その量は搾乳されたミルク全量の1割程度にすぎず、ミルクのまま販売した分はない。世帯番号⑯と⑰はブラーマンで、酪農協同組合の組合員であるが、いずれも牝水牛を僅か2頭飼育するにすぎず、搾乳したミルクはすべて自家で消費している。

このグループのウシ飼育の特色は、自家生産のウシの飼育を基本とし、購入ウシの割合はA-1型世帯より高いが、その他のグループより低い。また、一般に、このグループはウシ飼育への関心が低い。年間の購入飼料は、濃厚飼料のみで1世帯平均1,040ルピーとなっているが、これは搾乳中ウシ1頭当りの購入濃厚飼料費1,156ルピーより少額である。その理由は、搾乳中ウシのみに濃厚飼料を与えるという給餌方法が、この地方で一般化しているためである。ウシ飼育にあまり熱心でないこのB-2型世帯は、ミルク生産量やミルク脂肪率を高めるために濃厚飼料を与えるのではなく、他の農家の給餌方法を真似ているにすぎないと思われる。したがって、6戸のB-2型世帯のウシ飼育は、平均所有耕地7.6エーカー(灌漑4.7エーカー、非灌漑2.9エーカー)で行う専門的

な耕種生産に、付随的に結合した性格のものとして理解することができる。

## 3) 耕種生産が零細で家畜飼育にやや傾斜した世帯 (C型)

C型には、5世帯がある。うち2世帯は耕地を全く所有していないし、1世帯はウシを飼育していない。平均では、耕地面積が0.9エーカー(灌漑0.6エーカー、非灌漑0.3エーカー)、ウシ頭数が2.0頭である。3世帯は零細ながらも専業農家であるが、他は日雇いや土器造りを職業としている。

5世帯の家畜飼育状況を見ると、贈与されたゼブ牛1頭を飼うケースもあるが、その中心は水牛である。この水牛飼育も、一部は牛小作関係の下で行われている。ウシ以外の家畜飼育の例を村の南部・ドラハプラ(Dulahapura)小村に住む世帯番号⑱について見ると、この世帯は僅かの天水耕地で農業を営むが、1983年に毎年5~6月にやって来るムスリムの羊飼より4頭の山羊を購入し、繁殖させ、現在は年に4~5頭の牝仔山羊と2~3頭の年寄り牝山羊を肉用として販売している。販売先は毎年6~7月にバンディクイ、セカンドラ(Sikandera)、バスマ、マツラ等の町からやってくるカティックである。山羊の飼料としてケジュリとバプールの立木50~60本の利用権をその所有者と契約し、年間約700ルピーを支払っている。1日に3.4本の木の枝を落とせば、山羊20~25頭の飼料を十分賄える。山羊の販売収入は年間約2,000ルピーあるので、単純計算で実収入は約1,300ルピーである。また、土器造りのクマールである世帯番号⑲の場合は、20~30年前から水牛を飼育し、現在も誕生間もない牝水牛と2頭の牝水牛を飼育しているが、3頭のロバも飼育している。ロバは、主集落から6km離れた場所から土器造り用の粘土を運んだり、造った土器を村内の購入者や町の市場に運搬するために欠かせない存在である。原料用粘土の運搬は年間20~30回程度と言われる。

以上のようにこのC型における家畜飼育は、山羊飼育に畜産としての性格が認められるものの、飼料の確保等その存立基盤は弱く、現在以上の拡大は期待できない。その他の家畜、すなわち水牛やロバの飼育に至っては自家消費のミルクまたは自家業務の使役に当てられ、到底、畜産と言えるほどのものではない。

## 6. ミルク流通とジャイプール集乳圏

### 1 ミルク販売の伝統的方法

グジャラート州カイラ県アーナンド町に誕生したアムール（AMUL）を核とした新たな組織的ミルク流通は、1970年から始まる OF 政策の目玉として取り上げられた。これが、アーナンド方式であり、その後第2、3次 OF 計画によって州外にも急速に拡大し、現在では全国的な普及を見ている。いわゆる「白い革命」である。この OF 計画は、グジャラート州に隣接するラージャスターン州でも積極的に取り上げられ、今日では州内すべての県（District）が OF 計画もしくは世界銀行融資の対象地域になっている。第1次 OF 計画の対象になったのはピカネール（Bikaner）とバラトプールの2県だけで、本村が属するジャイプール県では、1974年から10年間、世界銀行の融資を得て OF 計画を進めた。

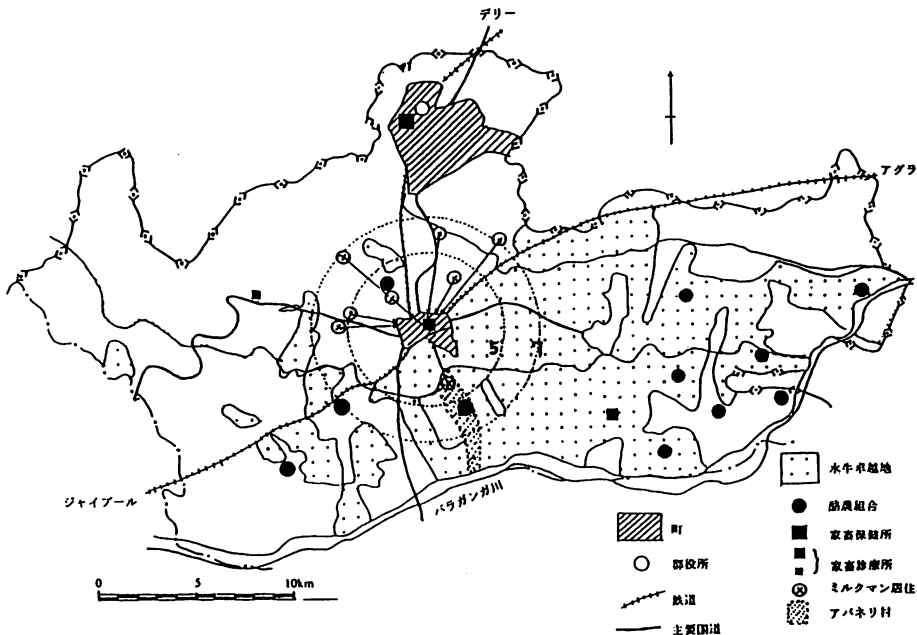
熱帯の暑さの中でのミルク産業は、搾乳するウシの生理的条件と搾乳されたミルクの加工・処理面で、温帯に比べ著しく困難な問題に直面する。特に問題となるのはミルクの商品化である。伝統的には、搾乳されたミルクの一部は飲用されるが、多くはギーに加工されて消費されてきた。ギーは食用のみならず儀礼用にも利用され、ヒンドゥー文化の生活に欠くことのできない神聖な商品とされ、国内に広範な流通圏を形成してきた<sup>43)</sup>。ここで問題とするのは生乳の流通であ

る。乳用ウシ飼育者が搾乳したミルクを、腐らせずに都市の消費者に届けるのは容易ではない。特に、交通条件の良くない地方の零細生産農家は、搾乳したミルクを自らもしくは産地仲買人を介して販売することに努めてきたが、結局は近くの限られた買い手に直接販売する外なかった。こうした特約関係下での価格形成は、買い手側に主導権が握られるのが常であった<sup>44)</sup>。

こうした状況の中で、アーナンド方式による酪農協同組合（DCS と略称）が設立されたことは、すこぶる重要である。この新しいミルクの集荷・販売システムは、零細生産者にこそ必要な組織であり、伝統的な村落のミルク生産・販売のあり方を大きく変えるものであったからである。しかしながら、ミルク流通システムがすべて新しく切り替わったわけではなく、伝統的流通システムは現在でもなお、いくつかの存在意義を有して生き続けている。その実態をしばらく見ることにしよう。

本村におけるミルクとギーの生産・販売は、主としてグジャー・コミュニティによって担われてきた。その主たる販売先は本村に最も近いバンディクイ町である。この町は前述したように鉄道交通の要衝であり、農村経済の中心地として発達しており、農産物をはじめとする物資の集配、人々の出入りが活発である。そのため、町内には数多くの茶店や菓子製造販売店が並び、そこで消

図9 水牛卓越地域とバンディクイ町集乳圏



費されるミルク量は家庭でのミルク消費とともに増加の一途をたどってきた。そうしたバンディクイ町でのミルク需要に対応して、アバネリ村を含む周辺農村でのミルク生産が発展してきたと言える。図9で明らかのように、町の南側つまりジャイプール・アグラ線の南に水牛飼育の卓越地域があり、これがバスワ郡下の主要なミルク生産地域となっている。

バンディクイ町の茶店・菓子製造販売店5軒での聞き取り調査によれば、これらの店にミルクを直接販売している農家は、半径6kmの圏内に分布している(表17, 図9)。1農家1日当り販売量は平均4~5kgであり、多くは月払いで現金を受け取っている。平均価格は、1989年8月の時点で1kg当り5ルピーであるが、季節によって変化し、ミルク生産が多くなる乾季には4ルピーに下がるが、5~6月の酷暑季には6ルピーに上昇する。例えば、店番号①では1日の購入量50kgを特定の生産農家10人から、同じく③と④はそれぞれ10kgを3人の特定農家から購入している。これらの店屋と特定農家との間のミルク販売契約は、農家が店主に直接ミルクを持って行って交渉し、店主が気に入れば成立するのが一般的と言われる。特に、証文は作られていない。

これとは別に、村に産地仲買人がいて、数戸の生産農家からミルクを買い集め、それを町まで自転車等で運び店屋に販売するケースも少なくない。つまり、表17の店番号②は、4人の仲買人から、店番号④は10人程度の仲買人からミルクを買い入れている。店主に言わせると、購入価格は、相手が農民であれ仲買人であれ違いはないと言う。しかし、アバネリ村の搾乳農家、特にグジャー・コミュニティの農家には、価格が良いことを理由に店屋に直接販売する方を好む傾向がある。彼らはまた、後述する村の酪農協同組合つまりDCSに対して、そのシャルマ(ブラーマン)の体質や政治的色彩を理由にして批判的である。

以上のように、グジャー・コミュニティには、伝統的な相対取引になお魅力を感じている農家が多数存在している。なお、以下の指摘は、伝統的なミルク取引が生き続ける理由を考える上で重要と思われる。すなわち、ラージャスターン州の4県下の例では、DCS 説立以前には余剰乳量の57%までがギーに加工されていた。その最大の理由は、ミルク生産が多くなる時期にはミルク売り商人が交通不便な僻地農村まで足をのばさなくなること、また、支払いの延期、取引量のごまかし、理由のない差し引き、時には支払い拒否など、さまざまな不正が横行していたことにあった。そのことは、たとえギーに加工したとしても、その販売に際してはしばしば行われ、生産農家は適正な利益を得ることができなかった<sup>45)</sup>。

## 2 近代的ミルク流通システム

広義の意味の近代的ミルク流通システムは、私企業及びDCSによるミルクの販売・流通を言う<sup>46)</sup>が、ここでは既述のアーナンド方式すなわち、DCSを中心とする組織的なミルク流通システムとして扱う。OF計画の狙いの一つは、この近代的流通システムの普及によって伝統的なミルク流通の悪弊を排除することであった。しかし、依然として、伝統的なミルク流通が村落、町・都市レベルにおいて存続していることは、前節の通りである。本村のミルク生産に関わる近代的なミルク流通システムとしては、①村内にあるDCS、②ドウサにあるミルク冷蔵センター、③ジャイプール市にあるミルク・プラントを中軸とする県ミルク生産者組合連合(District Cooperative Milk Producer's Union, 以下DCMUと略称)、の3段階がある。以下、それぞれについて検討しよう。

### 1) アバネリ村酪農協同組合とミルク流通

バスワ郡下には、1987年の時点で前掲図9の通り、アバネリ村を含め11の村落DCSがある。活

図17 バンディクイ町の茶店・甘菓子製造・販売店のサンプル経営調査

店番号	業種	店舗	借地料	店主年齢	雇用者数	居住地	店までの距離	所有地耕地(ビガー)	仕入れ量		仕入先	人数	居住地	支払方法
									朝	夕				
1	茶店	貸(個)	125	28	0	Pakil	0.5km	2	40	10	農民	10	6ヶ村	月1回
2	茶店	貸(町)	10	32	1			145	35		業者	4		
3	茶店	—	—	30	0	Bundikui	4~6km		10		農民	3	3ヶ村	月1回
4	茶, ミルク, 菓子	貸(個)	120	35	2		0.5km	4	30	20	業者	3		
5	菓子, 製, 販	貸(町)	10	55	(1)	Bundikui		9	10		農民	1	1ヶ村	毎日

(資料: 1989年現地調査による)

動している組合数はドウサ集乳地区に50数組合、ジャイプール集乳地区には353組合（1987年6月3日現在の登録数は433組合）である。ジャイプール集乳地区の組合員総数は43881世帯である。平均的には1組合当り5ヶ村をカバーしている。

ジャイプール県は、他の3県と共に世界銀行の資金・援助による酪農開発プロジェクトを進めた。その内容は、基本的にはOF計画とほぼ同様であり、以下に世界銀行による1977年の調査報告書に基づいて説明をする。

「農村ミルク生産者協同組合」の準則<sup>47)</sup>によれば、DCS設立の目的は、①農村搾乳業の改善により組合員を援助すること、②搾乳ウシの品種改良と健康状態の改善、③組合員の家畜配合飼料販売の組織化と搾乳ウシ用飼料生産の増加の促進、である。組合加入に関しては、①加入申請書が運営委員会の多数により認められること、②自ら搾乳ウシを飼育し、名目上の会員として連続3ヶ月間生産したミルクを組合に販売すること、③少なくとも株式1口以上を有し、1ルピーの入会金を支払うこと、さらに④自らはミルクやミルク製品の取引・営業は行わず、組合へのミルク販売に同意すること、等を条件としている。各組合員（1世帯1人）は、総会における1票の選挙権を持ち、組合管理委員会は総会で選ばれた9人の委員から成る。委員の3分の1が毎年ローテーションで退任する。委員会は委員総数の過半数（5人）をもって定足数とする。委員は無報酬で協同組合に雇用されることはなく、また家族構成員は協同組合と関連した如何なる営業も行うことはない。運営委員会が総会後の10日以内にその議長を指名する。

アバネリ村酪農協同組合の設立は1981年1月であり、同月から集乳を開始した。設立当初の組合員数は63人を数えたが、僅か2ヶ月後には35人に減少し、その後集乳量の量大を記録した1985年12月の中旬でさえ、28人であった。1982年12月当時のジャティール別組合員数は表18の通り、シャルマが12人と量も多く、搾乳ウシを最も多く飼育しているグジャーは5人に留まっている。組合のミルク購入額は、図10の通り、設立以来著しく変化し、1kg当りの価格上昇にもかかわらず、1985年12月をピーク（1日当り販売額450ルピー、165kg）にして減少傾向にある。これには、ミルク生産の季節性と集乳量の零細性とが知れる。当時の購入実績を見ると、販売組合員の数はアバネリ村21戸、その他周辺村が2戸で、1日当りの販

売量は2～5kg規模が圧倒的に多く、10kgを上回る世帯は僅か1戸のみである。ただしこの場合、その全量を自家で搾乳するのではなく、近くの農家のミルクを各庭先で購入し、組合で販売するものであった。このような産地仲買商的な例は、近年各地で見られる。水牛ミルクの多く販売される12月から1月に対して、表19により乾季から酷暑季への変わる時期であり水牛ミルク販売が減少する時期の3月のミルク販売実績（1989.3.7）をみると、アバネリ村9戸（ブラーマン6戸、グジャー2戸、ラジブート1戸）とバラガオン村4戸の計13戸が75.5kgをDCSに販売している。そのうち1日の販売量が5kgに満たないのが大半を占める。しかもこの時期のミルクは山羊などのミルクが混入されており、その価格は低く評価される。したがって、1日のミルク販売額は20ルピーに足りない。1987年8～10月の調査時点では、DCSの活動は、例年通り閉鎖されミルクの購入は休止されていた。

DCSの活動に対する農民の関心は、組合員数の推移にうかがえるように設立当時に比べ低下してきたと言える。その理由を関係者に尋ねると、①ミルク集荷が4～9月までの6ヶ月間休止すること、②人工授精等の獣医サービスが前宣伝ほど行き届いていないこと、③運営がブラーマン主導であること、等を挙げる。現在組合のすべての事務や業務（ミルクの検量や脂肪率検査）は、組合書記のV. K. シャルマ氏1人によって行われている。同氏はミルク購入期の6ヶ月間のみ勤務し、約3,500ルピー程度（日当が22ルピー）の給料しか得ていない。DCSの収支決算等は明らかにできる状態ではなく、同氏の根気でどうやら協同組合が維持されているといった状態である。いつ組合活動が停止しても不思議でない状況である。

本組合の集乳量が少ないのは、主要搾乳農家であるグジャー・コミュニティが組合への販売を好まないためであるが、それは①組合運営をめぐるジャーティ間の対立（主に政治的）があり、グジャーが組合運動に背を向けていること、が大きな原因と言われるが、より現実的な問題として、②組合がミルクを購入する際に脂肪率検査を行うため、バンディクイ町での直接販売の際に普通に行われている水の混入が不可能であること、が本音のようである。その他の理由として、③組合のミルク購入期間が10月から翌年の3月までの6ヶ月であり、周年の販売ができないこと、④本村における品種改良が遅れ、搾乳牛・水牛の多くが搾乳量のきわめて低い在来種であること、⑤村で集

表18 アバネリ酪農協同組合員のジャーティ別構成

1) 登録会員	組合員	2) 非登録会員	18
Brahmin	14		
Gujar	5	1) + 2) =	
Mina	3	3) 総会員数	42
Jain	1	(注) 1980. 1~82. 12	
Sani	1		
計	24		

(資料：アバネリ協同組合資料)

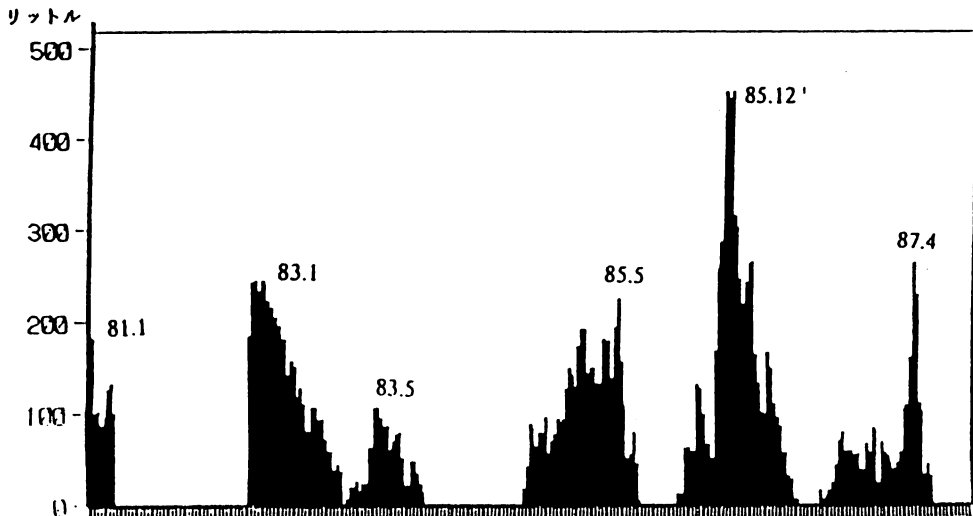
図10 酪農共同組合のミルク購入額の推移

(1989. 3. 7)

人 名	ジャーティ	村名	重量	価格	販売額 (Rs)
1 Simbhoo	Rajput	Abhaneri	5.0	2.52	12.60
2 Shonarayan	Gujar	Baragaon	2.7	2.62	7.07
3 Rawdhan	Gujar	Abhaneri	3.2	3.01	*9.63
4 Babulal	Gujar	Abhaneri	4.1	2.60	10.66
5 Ramoti	Brahmin	Abhaneri	3.5	2.60	9.10
6 Kalayan	Brahmin	Abhaneri	2.5	2.25	5.63
7 Ramjilal	Brahmin	Abhaneri	3.2	2.54	8.13
8 Ranbilash	Brahmin	Abhaneri	5.0	2.54	12.70
9 Ghanshyan	Brahmin	Abhaneri	5.3	3.27	*17.33
10 Kanchan	Gujar	Baragaon	16.0	3.52	*56.32
11 Kalu	Gujar	Baragaon	10.0	2.85	28.50
12 Chhotu	Gujar	Baragaon	10.0	2.85	28.50
13 Mukesh	Brahmin	Abhaneri	5.0	3.48	*17.40
合 計			75.5		223.57

(資料：アバネリ酪農協同組合資料) (注) ※は、Buffalo Milk を示す。

図10 酪農共同組合のミルク購入額の推移



(資料：アバネリ酪農協同組合資料)



乳されるミルクは、季節によって山羊のミルクが混入されるため、全般的に混合ミルク (Mixed Milk) として低価格に評価されていること、などが指摘される。

## 2) ドウサ用の冷蔵センター

村落にある DCS で集荷されたミルクは、約 30km 離れたドウサ町にある冷蔵センターで低温殺菌された後、ジャイプール市のミルク工場で量的に精製・加工され、直ちにデリーのマザー・デリー (Mother Dairy) その他各地に運ばれ、一般市民に販売される。ドウサ町の冷蔵センターは 1976 年に建設され、直ちに稼働された。このセンターへのミルク集荷ルートは 6 つあり、1976 年 4 月に最初の 2 ルートが、ついで 1981 年 1 月に 1 ルート、そして 1982 年 4 月に 4 番目のルートが設定された。アバネリ村 DCS からのミルクはこの 4 番目のバンディクイ・ルートを通じて集荷される。村のミルクは、村の主集落から 3 km 離れた舗装道路まで牛車または自転車によって運ばれる。バンディクイ・ルートは、この道路に運び出される 7 つの DCS のミルクをトラックに積み込んで、ドウサ町の冷蔵センターに運び込む。しかし、このルートはミルク生産の減少で 4 月から 8 月まで閉鎖される。年間を通じて集荷されるのは僅か 2 ルートである。1 つはラルソテ (Lalsote) ・ルートで、11ヶ所の DCS がこれを利用し、1 日の集乳量は 1,261kg (1987 年 3 月 4 日) である。もう 1 つのシクライ (Sikray) ・ルートは 15DCS で、同じく 2,296kg である。同じ日のバンディクイ・ルートの集乳量は僅かに 381kg であるが、これを年中稼働の上記 2 ルートに比べると、いかに小規模であるかがわかる。

ドウサ町の冷蔵センターは現在、50 余りの DCS のミルクを集荷し、これの低温殺菌に当たるが、センターの役割はそれだけでなく酪農の振興に関する諸活動の一部も兼ねている。1 日の処理能力は 2 万 kg であるので、現在の実集乳量はそれを完全には使いきっていないと言える。ドウサ町と同じ規模の冷蔵センターは、コトプタリ (Kotoputali)、マルプラ (Malpura)、ガンガプール (Gangapur) の 3ヶ所にある。

## 3) ミルク生産者組合連合

ラージャスターン州には 27 の県があるが、そのうちの 16 に DCMU が編成されている。DCMU の設立目的、活動内容を組合連合準則<sup>48)</sup>によって以下に概説する。設立の目的は、①組合員からの

ミルクの直接購入、②家畜飼料の購入・販売の組織化、③飼料開発の推進、④家畜病治療と人工授精サービス、⑤州連盟の依頼による傘下組合の家畜購入の代行、⑥ミルクの集荷ルートの組織化、⑦新たな DCS の組織化と現存する DCS の発展の促進、である。運営・政策立案には、次のメンバーによって構成される執行委員会が当たっている。①加入 DCS から選ばれた 12 人の代表者、②州連盟 (Rajasthan Cooperative Dairy Federation Ltd. 以下 RCDF と略称)<sup>49)</sup> からの推薦された者、③ DCMU の代表、④州連盟から選挙で選ばれた者、の計 15 名である。議長には、DCS の代表者がなる。設立の最初は、IDC/NDDB によって推薦された 20 組合の代表者のうちから、任期 1 年で県知事 (District Registrar) が 12 人を指名する。翌年からは細則の選挙規定に基づいて選ばれている。委員の 3 分の 1 は、毎年ローテーションで入れ替えがなされる。執行委員長は非選出の委員であり彼を除いて理事会を構成する。各連合会は、同時に諮問委員会を有する。その構成は、①県開発局長 (議長)、②ミルク連合会の議長、③県畜産局役人、④県徴税吏員、⑤県協同組合連合会の議長、⑥ IDC/NDDB の代表者、⑦連合会の会長、による。DCMU のメンバーは、すべての登録酪農協同組合であり、1 口の額面が 100 ルピーで、各メンバーは少なくとも支払い株式 1 口を保有していることが必要である。

ジャイプール DCMU は 1975 年に結成、登録され、同年から本県の酪農振興が、第 1 次、第 2 次 OF 計画に基づいて世界銀行プロジェクト (The World Bank Project) の一環として履行された。酪農振興による小農民の社会的・経済的向上を図るためであり、それは 1984 年まで継続した。さらにその後も、第 3 次 OF 計画により酪農の振興が図られている。県下及び隣接県で集乳されたミルクは、ジャイプール・ミルク工場 (1 日当りの処理能力、15 万 kg) で加工され、販売される。この工場は、県下にある 4 つの冷蔵センターによって支えられ、480 酪農協同組合と 4.3 万世帯の組合員を抱えている (1990 年現在)。県下のミルクの流れは、まず 4.3 万人のミルク生産者が 480 村落酪農協同組合へミルクを持ち込み、そこからさらに 4ヶ所の冷蔵センターへ、最後にジャイプール市内にある 1ヶ所のミルク工場に集められ加工され商品となる。このような集乳ルートが県下に張り巡らされている (図 11)。そしてこれによってミルク集荷がなされるが、1975 年以後の県下の酪農組合は、表 20 に示されるように、必ずしも順調に

発展してきたわけではない。それは、アバネリ村の例で見たように、ウシの搾乳量の増加（人工受精による品種改良等による）や家畜の健康管理（獣医サービス等）が、1980年代になってむしろ低下しているからである。特に、人工受精の成功率が10%程度に留まっていることは、搾乳業発展の大きな障害となっている。人工授精や獣医サー

ビスを中止したDCSが増えている傾向は、組合活動そのものの低下を意味していると指摘できる。

以上のように、ジャイプール県下の酪農組合は、1980年代初めに低落傾向を示したが、1984～85年頃から再び活発化に転じているように思われる。それはDCSの登録数の増加や組合員数と飼育頭数の著増に認められる。確かに従来とは異なる

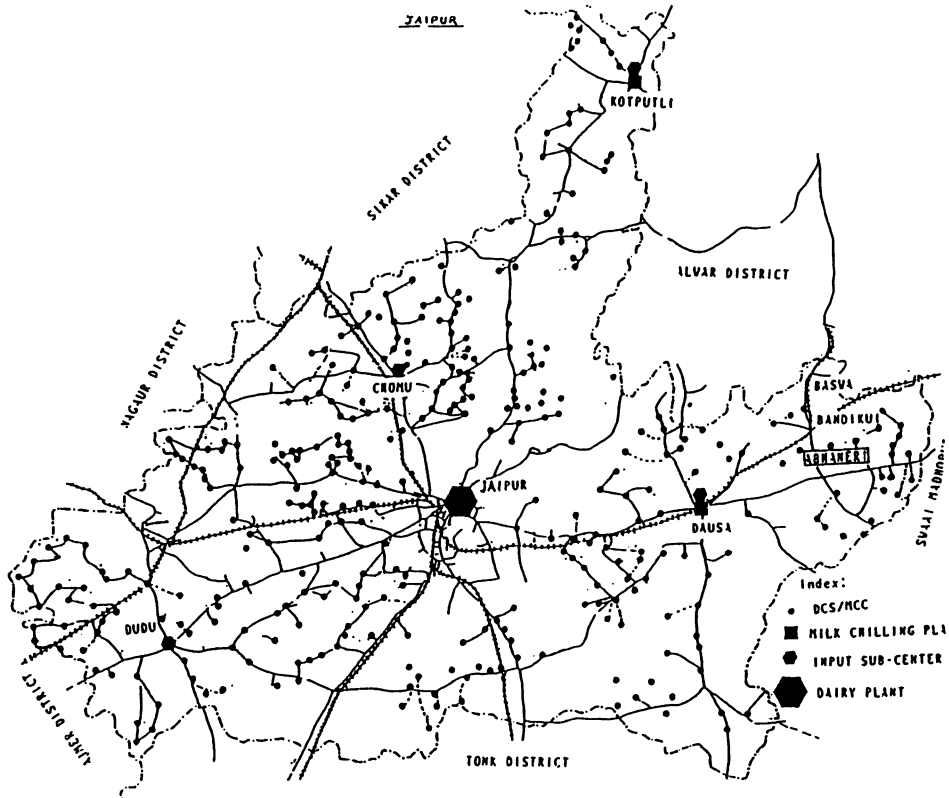


図11 ジャイプール県下のミルク集乳ルート

表20 ジャイプール県ミルク生産者協同組合連合（DMPCU）の活動実績の推移

	75-76	76-77	77-78	78-79	79-80	80-81	81-82	82-83	83-84	84-85	85-86	86-87年
酪農協同組合数（登録）	65	101	136	205	233	262	286	300	313	338	391	433
酪農協同組合数（計画中）	15	27	62	26	14	70	51	62	71	62	32	47
酪農協同組合数（合計）	80	128	198	231	247	332	337	362	384	400	423	480
組合員数	2241	6938	9700	13040	16241	19324	21315	23544	25276	29052	35340	43881
集乳量（10万 kg）	40.53	92.02	96.76	99.95	137.3	118.3	95.52	76.52	85.94	170.4	215.7	158.41
平均集乳量（日量）	11104	24976	26511	27273	37624	32419	26171	20964	23544	46688	59585	43519
平均輸送コスト（kg 当り）	8	9	11	12	11	18	19	26	23	14	15	20
人工受精を行う酪農協同組合数	32	112	163	130	78	80	102	105	125	138	155	160
人工受精件数	560	18073	19033	21536	20021	24107	28481	30345	33842	35129	38837	38920

（資料：Jaipur Zila Dugdh Utpadak Sankari Sangh LTD. Jaipur）

り、全体としてミルク生産に関心を寄せる世帯が多くなったし、特に注目されるのは、指定カーストや指定ドライブさらに婦人が酪農組合の運営委員会のメンバーに加わっていることであり、酪農業が貧困線 (Poverty line) 以下の零細農や農業労働階層にまで広がり、彼らの経済的改善に役立つようになってきたことを思わせる。

## 7. 結語

ラージャスタン州ジャイプール県東部に位置するバスワ郡アバネリ村を例にして、干ばつ常習地域の井戸灌漑農村の展開を最近30年間について見てきた。問題とした“農村経済の多様化”に関しては、以下の点が結論として要約できよう。

ロード・クリシュナ生誕の地に近いアバネリ村は、カースト・ヒンドゥー特有の社会構造をもついわばブラーマンの村落であった。そこでは、上位にブラーマン、ラジプート、ついでグジャー、ジェイン、カティ、ナイ、クマール等の農牧民、商工民が、村落内の各種サービスや労働を提供するミナ、コーリー、バルワ、チャマル、バンギーが生活してきた。このような社会的ヒエラルキーをもつブラーマンの村落にあって、牧畜カースト・グジャーが農村経済の多様化にいかなる役割を果たしてきたかを論じた。

本村における耕種農業の発展は、基本的には地下水の賦存に規定される。南北両側を河川で境されている本村落は、灌漑井戸の増設によって耕種農業の集約化が見られる。すなわち、天水依存の雑穀・バジラ中心の耕作から井戸灌漑による高収量品種のバジラや小麦の栽培、野菜等の商品作物の導入が行われ、耕種農業の発展が見られる。しかし反面、地下水位の低下や灌漑費用の高騰のために、耕種農業の集約化は、その限界をいち早く露呈している。こうした耕種農業の展開より少し遅れて、村落経済に二つの動きがあった。一つ

は、世帯主や兄弟がバンディクイ町やジャイプール市において就労し、現金収入を得るケースである。このケースではブラーマンが広域的に活動して安定した収入を得ているのに対し、低位ジャーティの人々は近距離のバンディクイ町で日雇いの職に就いている。こうした都市型就労が多いのは、この村が鉄道交通の要衝バンディクイ町に近く、かつブラーマン・コミュニティをドミナントとする村落であるためとして説明できる。しかし、このような村外就労には数の上でも限界があり、また村落自治の上でも問題が多い。

もう一つの動きは、さらに新しい変化である。従来は耕種農業に従属していたウシ飼育が、OF計画に対応してミルク生産を志向する牝水牛飼育に移っていることであり、耕種農業に並立し得る経営を目指す農家が多く現れていることである。しかしながら、ミルク生産を中軸とする畜産の発展は、政府の進める OF 計画を村民がどこまで取入れて農業経営に反映させるかにかかっている。その意味で村落レベルの酪農協同組合の活動が重要であるが、本村ではミルク生産の但手である牧畜カーストのグジャー世帯が、ブラーマン主導のDCSの活動に消極的であり、むしろバンディクイ町での伝統的な直接販売を強めている。また、粗飼料基盤の弱さから年間を通してミルク生産ができないこと、品種改良が進まないことから1頭当りの搾乳量が低位に留まっていること等、本村における搾乳業の本格的な展開には解決すべき多くの問題があると結論づけられる。

この問題は、DCSの活動にグジャーのミルク生産者を参加させることだけで解決するものでなく、ミルクの周年生産と販売が可能な飼育・技術体系を確立することが先決である。そこで改めて問題となるのが水である。限られた降水量と地下水という自然環境においても、安定的に粗飼料を確保できるような耕種農業——家畜飼育体系の構築が必須と言える。

## 【注及び参考文献】

- 1) 坂田・田中・橋本・福永 (1989) : 地上の天界を歩く人びと——北インドにおけるクリシュナ信仰と集団巡礼, 『アジア・アフリカ言語文化研究37』, p.74.
- 2) Agarwal, V. K (1988) : *Marketing of Dairy Products in Western U.P.*, Himalaya Publishing House, pp.2-3.
- 3) Gupta, S (1987) : *Rajasthan District Gazetteers, Jaipur*, Jaipur, Government of Rajasthan, p.882.
- 4) 1959年に州の地方分権制度の再編で、アバネリ村と他の4ヶ村 (Jasapala, Shekhpura. Haripura.

- Toorwara) により、新しくアバネリ行政村が誕生した。
- 5) 従来の研究は NDDB や IRMA を中心とした OF 計画の拠点となった地域・村落を対象とする研究に終始している。実質的な“白い革命”の地域的展開の研究は、一般的な地域・村落を対象にする必要がある。
  - 6) クーリアン博士の言った「乳業を興すことによって、インドの主に農村地域に於ける①技術的革新と②経済や社会的変化」の実現が、現実のものになりつつある。
  - 7) Gupta, G. D (1965) : *Census of India 1961 Volum XIV Rajasthan Part VI-B Village Survey Monographs 2 Abhaneri*, Delhi, Government of India, p.4.
  - 8) 牧野一成氏の間接報告会資料。
  - 9) 藤原健蔵 (1989) : 新聞・雑誌よりみたインドの「1987年大干ばつ」の実態, 『地誌研年報 I』, 広島大学総合地誌研究資料センター, pp.117-143.
  - 10) 安藤忠男氏の間接報告会資料。
  - 11) 注 7), p.2.
  - 12) Ibid., p.5.
  - 13) Ibid., p.5.
  - 14) Ibid., pp.8-9.
  - 15) Ibid., p.35.
  - 16) Andraea, B (translated by Gregor H.F) (1981) : *Farming Development and Space-A World Agricultural Geography*, Walter de Gruyter, Berlin. p.345.
  - 17) 注 7), pp.17-21.
  - 18) 上野登 (1979) : ヒマラヤ紀行 (5) ヒマラヤ三圃制とその位置づけ『地理』, Vol. 24, No.1, pp.91-97.
  - 19) 中里亜大 (1971) : インド牧畜業の研究視覚への私見——バンジャール地方の牧畜研究への足がかりとして一, 生活空間, 創刊号, 広島大学文学部地理学専攻生有志, pp.1-2.
  - 20) 注 7), p.20.
  - 21) この地域のみならず全国的にも村落共同放牧地は、過放牧状態にあり、草生力は低い。この放牧地に改善策について、アーナンド農村管理研究所 (Institute of Rural Management Anand, 以下 IRMA と略称) 等での研究がなされている。
  - 22) 注 7), pp.22-23.
  - 23) バンディクイ町が管理する牛市で、1960年に開設。年間2回の開市 (9月1~8日, 3月1~8日) で、開市毎に入札により開催権者が決定される。開催権は、約5,000ルピー程度である。入場頭数は、約5~6,000頭でその6~7割はバロックであるが、近年牝水牛や老廃水牛が増加している。売手商人には、ラージャスターンだけでなく、UP州やハリアナ州の博労が、出買いし郷里に帰る途中で市で販売する例も多い。参集する博労の多くはイスラムである。
  - 23) 注 5), p.20.
  - 24) ヒンドゥの神への「願い」が聞き入れられた時に、そのお礼として去勢していない「牝牛」を放つインド社会の通例である、本村では道路沿いに「水飲み場」を喜捨する慣行がある。
  - 25) Cambell, J. M. (1988) : *Hindu Castes and Tribes of Gujarat*, Vol. II, Second Edition, Vintage Books, p.469.
  - 26) Khatana. R. P (1992) : *Tribal Migration in Himalayan Frontiers-Study of Gujjar Barkarwal Transhumance Economy*, Vintage Books, p.54.
  - 27) 注25), p.481.
  - 28) カタナ氏とは数年来の親交があり、彼の自宅でインドの家畜飼育に関する多くの示唆を受けた。彼自身がグジャーであり、かつて遠くソ連邦のグルジアに招待された際に、インド・グジャーのルーツをグルジアで在ることを確信したと言う。ハリアナ州グルガオン市 (Gurgaon) にある彼の自宅で、所蔵している主に北部アラバリ丘陵地域の数十枚の地形図上にグジャー村落と確認された集落をすべて赤丸で記された資料を基に彼の主張を述べた。そして、彼のスクータで数ヶ村のグジャー村落を案内された。

- 29) 注7), p.17.
- 30) 米田巖氏の収集データによる。
- 31) 注30) に同じ。
- 32) 注30) に同じ。
- 33) Government of Rajasthan (1983) : *Census of India 1981 Series 18 Rajasthan Parts XIII-A & B District Census Handbook Jaipur District*, pp.XXV-XXVi.
- 34) 注7), p.20.
- 35) 注7), pp.18-20.
- 36) 注33), p.XiV. では、本業 (Main Workers) は、年間183日間以上就労した仕事をいう。現地調査では、この点を考慮してデータ収集を行い、就労構造の分析に利用した。しかし、就労者の解答に不明瞭なものが多々出て来る。その際には、10歳以上の男女で就学していない者については就労者としたが、70歳以上の男女は、たとえ解答に農業就労と答えていた場合でも、就労者から外し計算した。但し、年齢10～14歳でも農地を所有しない世帯の場合は、就労者から外した。
- 37) 調査にあたり、①親と一緒に妻子を村に残して、単身で村外就労している者は、村人として扱ったが、②独身もしくは夫婦で働きに出ている者は送金をしていても除外した。世帯主が、「家族員」として解答した中でも、30数名は村人としては数えなかった。
- 38) 注3), pp.892-893.
- 39) 注3), pp.902-909.
- 40) 北西インドでラクダの頭数が増加している要因の一つにラクダ荷車への手厚い補助金 (6,500ルピー, 14%/年) 制度がある。
- 41) 菱沼達也 (1962) : 『日本畜産論』, 農村漁村文化協会, pp.187-192.
- 42) ① Khurody, D.B. (1974) : *Dairying in India-A Review*, Asia Publishing House, Bombay, pp.42-44. ② FAO (1990) : *The technology of traditional milk products in developing countries*, pp.56-58.
- 43) Government of India (1976) : *Report of the National Commission on Agriculture 1976 Part VII Animal Husbandry*, pp.134-136.
- 44) Jain, M. M. (1986) : *Growth Pattern of Dairy Sub-Sector in Rajasthan*, Himalaya Publishing House, pp.103-108.
- 45) The World Bank (1977) : *India National Dairy Project*, Annex 2, pp.1-2.
- 46) Ibid., pp.3-5.

(本文は、『インド農村経済の多様化に関する地理学的研究—“緑の革命”から“白い革命”への転換を軸にして』(広島大学文学部, 博士学位論文, 1995. 3, 261頁, 未公刊)の本論Ⅱ, 52頁～124頁を転載したものである。)